

かくて二網、七曲、下貝らは夕轟打出を水中にて生け捕って、ひしひしと縛めつつ賤の砦に引き持て来れば、大箱は急がわしく小蝶、呉竹、沢蟹らと諸共に忠義堂に出迎えて、まず手づから打出の縄を解き捨てて懇ろにいたわり慰め、

「戦いの習いにて心ならずも鎌を磨き、事がここに及べども、帝に対し奉り、元より逆心あるにあらず。三世姫の御為に北条義時を討ち滅ぼして、頼家卿の恨みを返し、且つ亀菊を追い退けて、京鎌倉の禍罪を払わんとての業なれば、これすなわち君の御為、世の為、民の為なりかし。願うは早く迷いを覚まして、三世姫に仕えまつって、共に亀菊を討ち滅ぼして、いかで君の御傍らを払いまつって忠臣義女の誉れを後の世に残したまわずや」と道理せめて説き諭せば、沢蟹も又、進み出て、

「私も去ぬる日に戦い利あらず、遂に虜になりしより、命は無きと思ひしに小蝶、大箱の二刀自がこと更に情け深くて助けられたるのみならず、重く用いて一陣の大將に成されしなり。さあ志を改めて、大義の群れに入りたまえ」とて等しく言葉を尽くすにぞ、打出は否むに由無く遂に心を傾けて小蝶、大箱にぞ従いける。その折、江鎮泊の女大將著、呉竹を始めとして、皆々打出に対面しつつ酒宴を設けて喜びの盃をすすめけり。

かかりし程に呉竹は小蝶、大箱にうち向かい、

「夕轟の刀自が味方に加わり、今より敵の石火矢を此方の物に成すと云えども、彼の芍薬の連環馬を挫く事はなお難かり。良い謀り事は無からずや」と云いつつ辺りを見返れば袖花は聞いて進み出て、

「彼の連環馬を突き崩さんには鎌槍にしく物無し。そもそも世には鉾のみにて鎌槍は無きにより、これを知る者あらざれども、私の祖父は故あって唐土人に伝授せられて家の秘伝にしたるなり。されば我が身もその槍を鍛えいだすは難くもあらねど、使う術を知らざれば、その槍あっても甲斐無き業なり。これを使う者は此の御国には只一人あり。そは又、私の従姉妹女にて、都に在って院の御所に宮仕えしたてまつる女武者の頭にて除夜と呼びなす勇婦なり。彼女は親の時よりして鎌槍をよく使えば、世の人遂にあだ名して槍梅枝除夜と云えり。元彼の除夜は源氏の嫡流、源頼光朝臣の子孫にて、祖父左衛門尉溝杭の頼資主の時よりして家に伝わる兜あり。昔、源頼光朝臣が大江山に分け上り、酒呑童子を退治の折に彼の膝丸の太刀をもて童子の首を▼斬りたまひしに、その首ひらりと舞い上って頼光の召したりける兜の鉢に食らい付きしと世には云い持て伝えしが、その事違わざりけるにや、今もその兜には大きな歯の跡あり。さてその兜は頼国主より除夜の家に伝えて秘蔵する事大方ならず、人その由を伝え聞いて見まく欲とて請い求めれども、除夜は決して見る事を許さず、只その先祖頼光朝臣の忌日にはその兜を取り出して、床に飾り神酒を供えて、慎みて祀るのみ、されば除夜の亡き親は院の北面の武士にして淡路之介源頼基と呼びなしたり。不幸にして男の子無く娘除夜のみなりに、二親ながらうち続いて先に世を去りたりければその家断絶すべかりしに、除夜は女ながらも父の武芸を受け継いで、且つ世には人の知る由も無き鎌槍をよく使うにより女武者の頭になされて亀菊の手に付けられたり。さて又、その兜をば神変奇特の兜と名付けて、常には塗り込め(土蔵)☆に置くのみなり。私は従姉妹達なれども、この身貧しくなりしより年頃疎遠

になりたり。さばれ二親が世に在りし程は互いに訪い訪われもして、見も忘れざる親類なれば、
今も都に赴いて訪えば喜びはべるべし。もし人あって味方の為にその兜を盗み取れば、ついて私に
謀り事あり。彼の除夜をおびき寄せ、遂に味方になすべきなり。その謀り事は斯様斯様」と事つま
びらかに囁いて、

「私は此の砦の鍛冶職人らに教えて鎌槍を多く作らせ、且つ除夜を師範として全て味方の軍兵
にその鎌槍を使う術を教えさせたまわれれば、芍薬の連環馬を破る事易かるべし。この儀はいかが
と他事も無き軍略その図に当たりしかば、小蝶、大箱云えば更なり呉竹も深く喜んで、

「その謀り事は真に妙なり。その兜を盗み取らせんには究竟の人こそあれ、手長蛭早潮これなり。
彼女は垣をくぐり塀を乗って盗む技に妙を得たれば、すなわち彼女を用いるべし。まず鎌槍を作る
由を職人らに教えたまえ」と云うに柚花は心得て、ひな形を描き、鍛冶職の者を呼び集めるに、此
の賤の砦には予て萬の職人さえ、多く集いてありければ、およそ鍛冶の技をなす者は皆柚花の教
えに従い、夜も日も分かず精を出し数多の鎌槍を作りけり。

かくて又、呉竹は小蝶、大箱と談合して、八重機彩雲と呉藍山桃に雑兵幾人かを従わせて忍び
やかに都へ遣わし、打出が石火矢に用いるべき硫黄、煙硝を多く買い取らせつつ、賤の砦に蓄え
置きけり。これより先に呉竹は手長蛭早潮を小蝶、大箱らがうち集い居る一間へ招き近付けて、さ
て柚花と示し合わせて、槍梅枝除夜の家の中なる神変奇特と云う兜を盗み取り、それを囷にし
て除夜を賤の砦へおびき寄せべき謀り事を囁き示して、

「御身は柚花と諸共に早く都へ赴いて手立てを巡らし、その兜を盗み取りたまえかし」と云うに早
潮は心得えて、一議に及ばず柚花と共に旅装いを調べて都を指して発ちいでける。此の時又、呉竹
は女韋駄天夏女にも謀り事を囁き示して、後より都へ遣わしけり。ここに又、槍梅枝除夜は女なが
らも武芸に長けて、且つ世にはなお稀なる鎌槍を使う事はその父淡路之介頼基にも劣らぬ達人なる
をもて、二親が世を去りし後に女武者所の▼頭に成されて亀菊の手に付けられしかば、これより
して除夜は院の御所へ参り仕えて、早年頃を経る程に家に仕える男に真金井味噌太夫と云う者あり。
父頼基の若党にて、その心映えまめやかなれば、今は事さら萬の事をうち任したりけるに、味噌太夫
の女房お針も夫と共にたち働きして助けになる事多かりけり。これらが他には鶺野女と云える僅か
に一人の腰元があるのみで、談合相手になりぬべき親類とては無かりけり。

さる程に除夜はある日夕七ツの頃おいに院の御所より退き来て、味噌太夫、お針らに云う様、
「今日は先祖頼光朝臣の御忌日に当らせたまえば、いつもの如く神変奇特の兜を出して、神酒を供
えて祀り奉らんとし思しかども、宮仕えに暇無くてかくは遅刻に及びたり。明日も又、御用あれ
ば明け七ツより院参すなれば、今宵夜すがら祀らん」とて、やがて自らその兜を塗り込めより取り
出して、東面の二階の床の間に飾り立て、神酒、棗(供え餅)、種々の供え物を前机に置き並べ、灯明
を左右に照らして武運を祈る事半時(刻)ばかり、とかくする程に日が暮れしかば、兜の辺にはしば
らく味噌太夫をはべらして、除夜は下屋へ下って夜食を食べ風呂に入って、明日院参の仕度を調べ、
その後又、二階に上って兜の辺をちっとも離れず、なお丹精を凝らしつつ、その夜と共に明かしけ
り。

○さる程に早潮は柚花と諸共に既に都へ着きにければ、三条大橋の辺の旅籠屋に宿りを求め、その
夕暮れに宿の主人に、

「我らは用事があるにより、今宵は余所へ赴くなり。遅くば明日こそ帰るべけれ」とさり気無く云い知らして^{ゆのはな} 袖花をのみ留め置き、一人宿を立ち出て^{かね} 予て聞きしを心当てに、一条柳の馬場の^{いちじょうやなぎ} 辺の^{ほとり} 除夜の屋敷に忍び近付いて内の様子をうかがうに^{けんにんじがき} 建仁寺垣を打ち巡らしたる東の方に一ト株の大きな柳あり、此方へ長くしだれたり。この時日は早暮れ果てて、折から宵闇なりければ、その柳にすがりつつ内の様子をうかがうに^{あるじとしのよ} 院の御所より既にまかつて、^{ひがしおもて} 東面の二階に在り、今宵は先祖頼光朝臣の忌日なりとて彼の兜を飾り立て、終夜祀らんと云う声したり。早潮はこれを聞きながら折こそ良けれと密かに喜び、^{ひそ} 軒端に近き木陰に隠れて尚も様子をうかがいけり。

○さる程に^{やりうめがえとしのよ} 檜梅枝除夜はその終夜二階に在って慎んで通夜せしに、早▼明け方になりければ、すなわち真金井味噌太夫とその妻お針を招き寄せ、

「今朝は常より院参早かり。我が身はそれ故、心も急けば兜は此のまま預け置くなり。我が身が帰り来ぬるまで、心を付けよ」と言葉せわしく云い示しつつ、うやうやしく兜を取り下ろして箱に納め、^{ささりんどうもん} 笹竜胆の紋が付いたる^{もえぎ} 萌葱の風呂敷に包み、^{なかむす} 仲結びの紐掛けて床の間に差し置きつつ、忙しく^{しもや} 下屋に到って用意の朝飯を^{あさいい} 食べ、かたの如くに仕度して未だ夜の明けざるに^{したく} 供人を従えて院の御所へと参りけり。味噌太夫、お針らは除夜を見送り果てて、そのまま内に入りけるに、此の時明け七ツの頃なれば共に二階にうち上りしが、しばらく休息すべけれとてその次の間に^{しりぞ} 退いて思はずしばしまどろみけり。

かかりし程に早潮は今除夜が供人を急がして出て行きたる内の様子をうかがいすまして、此は^{くつきょう} 究竟の折なりと思いにければ、ちっとも猶予せず^{ゆうよ} に軒端に近き松の枝より伝って^{ひさし} 庇に忍び上り、二階の戸尻をこじ開けつつ身を細め内に入って彼の床の間に置かれたる兜を早く盗み取り、風呂敷に包めるままにもたげ出して^{ひさし} 庇より又、木を伝い庭に下って背戸の方に^{せど} 赴くに、先に除夜がいでしより夜は明け方の事なれば元の如くに錠を下ろさず、只掛け金のみ、^{ひじつば} 臂坪へ引き掛けてありしかば、早潮これを探り見て、仕合わせ良し（造化精妙）☆と一人うち笑み、密かに折り戸をうち開き三条の宿に立ち帰る程に、夜はほのほのと明けにけり。

此の時^{ゆのはな} 袖花は起き出て早潮の吉左右（吉報）を待つ間程無く、早潮は兜を盗み背負い帰って、昨夜の^{しゅび} 首尾を斯様斯様と^{ゆのはな} 袖花に囁き告げて、

「我らは当所を立ち退くべし。御身彼処へ行かんとらば、未の頃より出掛けたまえ。その頃には除夜が帰って宿に在るべきなり」と云うに^{ゆのはな} 袖花は頷いて、

「その儀は既に心得たり。御身は又、^{おんみ} 大津の^{おおつ} 辺りを^{ゆる} 緩やかにぶらついて、予て謀りし^{かね} 趣を^{おもむき} 違えたまうな」と囁けば、早潮も又、^{うなず} 頷き合って、その兜の風呂敷包みを背負い上げつつ^{ゆのはな} 袖花に別れて出て行きにけり。

○されば又、^{みそだゆう} 味噌太夫、お針らは兜を大切に思うをもて、その身の部屋へは^{しりぞ} 退かずに夫婦二階の次の間にうたたねして在りけるが鳥の声に呼び覚まされて夫婦ひとしく驚きながら急がわしく身を起こし、窓の戸をまず開けんとして床の間の方を見るに、此の^{あかつき} 暁に預け置かれたる兜の風呂敷包みが無かりしかば、「此はそも、いかに」とばかりに驚く事大方ならず、騒ぐ心を押し鎮めてなおも^{あた} 辺りをよく見るに二階の雨戸が外れてあり。さては盗人が入りしなり、「口惜しや、いかにせん」と足ずりしつつ^{くちお} 悔い恨めども、早時移りし事なれば追うとも甲斐無く尋ねるに手掛かりとては無かりけり。

これより家内は騒ぎ立て評議まちまち事果てし無き中に、味噌太夫は覚悟を極めて、その身の部屋に引き籠もり腹を切らんとしたりしを、女房お針、腰元鶺鴒野女、その余の者も走り集いて諸共に押し止め、

「死なんと思ひ定めたまは道理に候えども、只今自害しては益無し。手立てを巡らし盗人の行方を尋ねて、その兜を取り戻したまわずや」と道理せめて諫めしかば、味噌太夫はようやくに自害を思い止まって使いを院の御所へ遣わして、除夜にしかじかと事の由を告げたれども宮仕えの身にしあれば、さりとて早く帰る事も得ならず、この日未の頃おいに除夜は院の御所をまかつて帰り来なければ、味噌太夫、お針らは兜紛失の由を告げ、死なんと思ひ定めたまはる身の過ちを詫びにけり。

しかれども除夜はあえて怒れる気色も無く、

「年頃ちつともな過ぎり無く人には見せぬ家の重宝。昨夜たまたま取り出して曉までは通夜せしに、僅か一時ばかりの程に紛失せしは案内を知りたる者の業なるべし。必ずしもそなた夫婦の過ちとのみ云うべからず。只これ時の不祥なれば、もしや先祖の御心に叶わぬ事もありけるかと思えばいとど▼空恐ろしけれ。この事はまず人に知らさで忍び忍びに盗人の在処を詮索したらんこそ、死するにましたる主の為、よくよくこの儀を思いねかし」と言葉静かに諭すにぞ、味噌太夫、お針らは痛み入りたる主の慈悲に又、云う由も涙ぐむ目をしばたたきかこまて、その大恩をぞ感じける。

○かかる折から柚花は除夜の宿所へ音ないて対面を乞いければ、除夜はこれを聞きながら、折悪かりと思えども、絶えて久しき従姉妹女が遙々尋ねて来にけるをつれ無くもてなさんはさすがにて、呼び入れて対面しけり。その時柚花は除夜にうち向かい、

「先に二親が世を去りしより世渡る業に暇無く、かくは疎遠にうち過ぎはべり。しかるに母の臨終にいささか形見を参らせよと云い残されたる事あれば、これらの由を告げんとて、ようやく参りはべりき」と告げて、五両の形見金を懐より取り出して除夜に渡せしかば、除夜は驚き、且つ感じて、

「叔母御前が世を去りたまひし由は風の便りに聞きながら、宮仕えにしばらくも暇無き身の悲しさはその折々の訪い訪れもな過ぎりにのみ過ごせしに、思い掛け無く形見の金を賜ればとて受けられんや。これはそなたに留め置き、元手にでも成したまえ」と否むを柚花はなお勧めて、

「さ宣いては我が母の遺言は仇とならん。まげて受けさせたまいね」と云うに除夜は否みかね、只感涙の外も無くようやくに受け納めけり。その時柚花は除夜をつらつら見て、

「御身の面持ち常ならず、物思わしげに見えたまは心に掛かる事もやあるか」と問われて除夜は隠すに由無く、

「さては気色に見えたるか。従姉妹達なる御身には今更隠すべくもあらず。その故は斯様斯様」と世に二つ無き家の重宝の神変奇特の兜をば、此の曉に盗人に奪い取られし事の趣、その風呂敷は萌黄にて笹竜胆の紋を染めたるそらの事まで囁き告げるを、柚花は聞きつつ眉をひそめて、

「それには思い合わせる事あり。私は先に日ノ岡の辺にて昼飯を食べんとて酒売る店に立ち寄りしに、年は二十八九にて眼つぶらに色浅黒き一人の女が衝立の陰にて酒を飲んで居り、ひどく酔いたる面持ちにて、「かくては道を行き難かりしばらくここを貸したまえ。一眠りして醒まして行かん」と云いつつ、やがて肘枕して前後も知らず臥したりき。しかるにその女の方辺に打ち下ろしたる

風呂敷包みの色はすなわち萌黄にて、いと大きな笹竜胆の紋さえ確かに見えたりき。思うに御身の兜を盗みし曲者は彼の酒屋にて得見たる女でありけんを、知らぬ事とは云いながら捕らえざるこそおぞましけれ」と云うを除夜は聞きながら、

「そは疑うべくもあらぬ、兜の盗人にこそあるべけれ。しかはあれども時も早いたく移りし事なれば、追い駆けるとも及ぶべからず。いかにすべき」とばかりにひたすら遺恨に耐えざりしを袖花は「さこそ」と慰めて、

「彼の者はひどく酔い臥したれば、例え醒めて出て行くとも、未だ遠くは走るべからず。私が案内をしはべらん。さあさあ追い掛けたまわずや」と真しやかにそそのかせば、除夜は「実にも」とせき立って早発ちいでんと用意をせしを味噌太夫が押し止めて、

「その儀ならば拙者に仰せ付けられ下さるべし。彼の御兜の紛失は我々夫婦の過ちなるに、御身自ら追わせたまうを知りつつ徒に御留守をせんや。只うち任せたまえかし」と云うを除夜は笑いつつ、

「そなたは年も寄りたるに、疝氣(下腹部痛)によって腰が引きつり道行く事は不自由なるに、追うとも何条及ぶべき、由無き義理を云わんよりお針と共に留守をせよ」と言葉せわしくたしなめて、裳裾を引き上げ抱え帯して、仕込み杖を携えつつ懐剣並びに捕り縄を懐に隠し持ちて、網代笠を深く戴き、一人の下部を従えて袖花と諸共に近江路指して急ぎけり。

○されば又、手長蛭早潮は今朝袖花に立ち別れて三条大橋の旅籠屋をいでしより、大津の方へ赴く程に、藪の下にて女韋駄天夏女が呉竹の指図に任して▼此方を指して来るに会いけり。その時夏女は早潮を道の木陰に招き寄せて兜の事を尋ねれば、早潮は微笑みながら昨夜除夜の宿所に忍び入り、此の暁にその兜を盗み取りたる事の趣を斯様斯様と囁き示して、風呂敷包みを解き開き、やがて兜を渡すにぞ、夏女はひたすら早潮の働きを誉めて兜を受け取り、別の風呂敷に押し包んで背負ってやがて早潮に別れて江鎮泊へ帰りけり。

その時早潮は彼の兜の空箱を元の如くに風呂敷に押し包みつつ背にして、あちへ立ち寄りこちへも立ち寄り、或るいは酒を飲み、飯を食らいて、人の目に付く如くにしつつ、一人悠々寛々と大津の方へ赴きけり。

さる程に除夜は袖花と諸共にしきりに道を急ぎつつ日の岡まで来にければ、袖花は予ねてより早潮と示し合わせ置きたる酒屋の店へ立ち寄って、

「今日昼の頃に斯様斯様の一人の女がこの店にて酒を飲みたるを我見たり。彼女は何処へ行きたるやらん」と問うを亭主は聞きながら、

「問わせたまうその女中はひどく酒に酔い臥して、今しがたまでここに在りしが、ようやく醒めて大津の方へ赴いてこそ候なれ」と云うに除夜は急き立って、

「しからば未だ遠くは行かじ。さあ追い付かん」と袖花の袖を引きつつ急がせば、袖花も又、一議に及ばず、「さらば急がん、さあさあ」と先に立ちつつ喘ぎ喘いで大津を指して追う程に、道にて日は早暮れにけり。

さて此の所の旅籠屋をあちこちと無く尋ね尋ねて、「かかる女は宿からずや」と問うと云えども行方は知れず心しきりに苛立つのみ。今更にその甲斐無くて、夜は早五ツになりけり。その時袖花が云いける様、

「今宵尋ねて知れずども、彼の盗人めは此の宿ならで、何処へか泊まるべき。我々ここに一夜さ明かして、明日の明け方より此の宿の出口に下待ちして居らば、必ず彼奴を捕らえるべし」と云うに除夜はうち案じて、

「そはしかるべき事ながら、私は日毎に院の御所へ参り仕える身にしあるに、ここに一夜は明かし難し」と云うを柚花は聞きながら、

「それも又々、詮術あり。供人を都へ歸して由を味噌太夫とやらんに告げ知らせ、御身俄かに病気の由を亀菊殿へ聞こえ上げ、術よくこしらえたまわれれば一日二日は障りはあらじ」と云われて除夜は頷きつつ、「さらば、その儀に従わん」とて、供の下部に斯様斯様と心を得さして大津より都の宿所へ歸し遣わし、除夜と柚花はそのまま此の所に宿りを求めて思い掛け無き旅寝をしつつ、その明けの朝未だきより共に旅籠屋を発ち出て宿の出口に付けて居り、行き交う旅人に心を付けて今か今かと待つ程に、朝日は既にし上って辰の時の頃おいに、いと怪しげなる一人の女が縹に笹竜胆の紋付いたる風呂敷包みを背負いつつ、向かいの横町の辺より忽然といで来て、東を指して走り行くを此方の二人はきっと見て、紛う方無き風呂敷包みは兜の盗人なりけりと問わでも知るき心の喜び、まっしぐらに追っかけて引き捕らえんとしたりしを早潮は早く見返って、振り払いかい潜って逃げるを行かしと除夜、柚花は又、左右より引き挟んで小腕取って動かせず、怒れる声を苛立てて、

「盗人女が逃げるとて、何処へか逃がさんや。汝は昨日の明け方に我の宿所に忍び入り、家の重宝神変奇特の兜を盗み取りたる事は問わでも知るき風呂敷包みの染め色と紋に見覚えあり。今は逃れぬ天の網、早く兜をいださずや」と息巻き猛く小突き回して地上へはたと引き据えたり。

されども早潮はおめたる色無く、見返りながらあざ笑い、

「こうなるからは是非も無し。ある人に頼まれて除夜殿の秘蔵めされる兜は俺が盗んだが、人手に渡してここにはあらず。これ見て疑い晴らしね」と云いつつその風呂敷包みを下ろして渡せば、除夜、柚花は共に包みを解き開き箱の内を改め見るに、既に兜は無かりけり。除夜いよいよ苛立って用意の捕り縄を手繰り出し、罵りながら早潮を縛めんとしてけるを早潮騒がずあざ笑い、

「待ちねえ姉御、十重二十重に縛りからげて都へ引くとも劔の峯ではいつかないつかな、命に掛けて兜の行方を白状すべき我にはあらず。そこで一番柔を入れて、相談づくで出直せば兜を御身に返すべし」と云うに柚花は頷いて、

「しからば又、兜をば早く何処へ活却せしぞ」と問えば早潮、

「然ればとよ。ここよりして遠くもあらぬ坂本の辺なる仲間の者へ渡せしのみ。頼まれたる旦那へはまだ見せもせぬ兜なれば取り戻す事いと易し。俺と一緒に坂本まで御座らば兜を返すべし。その代わりに我らを許して、命は▼兜と引き替えに、そこから放ちやりたまえ」と云うを除夜は聞きながら、

「今云う由が偽りならば、我が身も事を好まんや。願いのままに兜と命はその折引き替えに許してやらん。違えな」と云うに早潮は微笑んで、

「そは結構なる御報謝なり。さらば用意をしたまえ」と云えども除夜は油断せず、取り出したる早潮の腰を縛って、さて柚花と談合する様、

「ここよりして坂本へはさまで遠きにあらねども、先にて暇の入る事あれば、今日も都へ帰り難かり、そもいかにして良からんや」と問うを柚花は聞きながら、

「その儀は氣遣いしたまうな。昨夜供人を都へ歸して、味噌太夫夫婦の者へ心得させし上なれば、よしや今宵は都まで歸り難き事あつても公様の咎めはあらず。そをかにかくと思ひ過ごして、もし此の折を失えば兜は人手に渡らんのみ。心を定めて急がせたまえ」と云うに除夜「実にも」と思つて、遂にその儀に任しつ、さて早潮を引き立てて湖水の方へ行く折から道の辺の茶店の床机に腰うち掛けて憩居る旅の女が二人あり。早く柚花を見出し、「やよ、なうなう」と呼び掛けつつ走り出て招くにぞ、柚花は急に見返つて、「此は此は思ひ掛けざりき」と云いつつ茶店へ立ち寄れば、除夜も早潮を押さえしままに心ならずも茶店の門にぞ佇みける。

その時柚花は除夜にうち向かい、

「この二人の女中達は私が年頃世話になりたる深草の里人なにかしの内方にてはべるなり。大津にも坂本にも姉妹もあり、叔母御も居ませば、折々こちらへ來たまうなり」と告げて又、二人の女に、

「御身たちも大津より坂本へや赴きたまうか。私は又、此の女中と共に坂本へ行く用事あり」と云うに二人は頷いて、「そは幸いなる事にこそはべれ」。

傾城水滸伝 第十三編ノ壺 曲亭馬琴著 歌川国安画

「船にて坂本へ赴くなり。今日は殊更追い風もよし。船路を走らばまたたく隙に彼処へ至るはいと易かり。よつてここにて船を雇つて、只今乗らんとするなり。されば水夫の者どもが船ごしらえをすると云えばしばしここにて待ちて居り、御身たちも坂本へ用事あつて行きたまえば、我々と諸共にその船に乗りたまえ。良き足休めにはべらんかし」と云うに柚花は喜んで、さて除夜に斯様斯様とその由を告げるにぞ、除夜は聞いて思ふ様、

「実に我々は此の盗人を守つて陸路を彼処へ行かば、道すがら氣遣い多し。船にて走らば繋かずとも取り逃がす事は無し。此は便船をするこそ良けれ」と早く思案をしたりしかば、そは幸いなる事なりとてやがてその二人の女に近づきになり、由を告げて共に茶店に休らう程に、水夫らは茶店へ声を掛けて早船ごしらえはい出来たり、「さあ乗りましたまへ」と急がしけり。

しかるにこの船の水夫は二人にて女なり、「いかなる故にて、水の上の稼ぎをするぞ」と尋ねるに、「親は船にて世を渡りしが此の春の頃に世を去りぬ。あまつさえ母親も長き病にうち臥して、頼み少なき朝夕の煙りと共に瘦せ細る葉の代も整わねば、我ら姉妹で船を漕ぎ、僅かに親を養ひはべり」と語るを除夜は聞きながら、▼

「かく頼もしき孝行の女子もあるに、世の中の人々の心は様々にて盗みをしぬる女もあり」と思へばいとど侘びしげに共に船にぞ乗りける。かくて水夫の女姉妹は追い風に真帆を上げ、舵を取りつつ走らせるに、鳩の海面静かにて、さすがに眺め無きにあらず、その時その二人の女は用意のを取り出して除夜、柚花にこれをすすめ、

「今日は船に乗らんと思つて、大津にてちとばかり求めて來ぬるはこれのみなり。柚花さんのお連れ様は聞けば都の歴々にて、その盗人を捕らえんとて遙々追いかけたまいぬる昨日よりのお心遣いをさこそと察しはべるなり。何は無くとも酒一つ、御前☆そこから良き様におすすめ申してたまひね

かし」と云うに^{ゆのはな}袖花は心得て、その^{さかずき}盃を取り上げて^{としのよ}除夜にすすめるにぞ、^{としのよ}除夜は思い掛け無き人の情けを喜び聞こえて、

「まず、そなたより始めたまえ。我ら頂きはべらん」と^{いな}否むを聞かぬ二人の女は又、^{さかずき}盃を押しすすめて、

「我々は町人の^{さいし}妻子にてはべるものを^{おれきれき}御歴々のあなた様へ^{さかずき}盃をさされんや。まずまずまげて始めたまいて、我々へたまいねかし」と云うに^{としのよ}除夜は^{いな}否みかね、「しからば許したまいね」とて^{さかずき}盃を戴いて、喜びを^{いっこん}述べ^{いっこん}献受けて二口三口に飲み干しける。

程しもあらず^{としのよ}除夜はたちまち心が^{めい}滅入るが如くに^{まなこ}眼暗み手足痺れて、口中より^{こうちゅう}涎を流し^{よだれ}思わずはたと倒れつつ、^{あやめ}黒白も知らずなりにけり。これはこれ、^{かね}予てより皆^{はか}呉竹の^{ごと}謀り事にて^{ゆのはな}袖花と相知れる旅の女と思わせしは女^{おんな}韋駄天^{なつめ}夏女と^{くちぶえ}口笛の^{てりうそ}照鷲なり。又、此の船の水夫にいでたちたるは夕虹の^{ひぐま}日熊と^{はるがすみ}春霞^{たつま}龍間の^{なつめ}姉妹なり。されば夏女、^{てりうそ}照鷲は^{すいづつ}吸筒の酒の内に^{しび}痺れ^{ぐすり}薬を入れ置いて、^{としのよ}今除夜に飲ませしかば、^{としのよ}除夜はたちまち倒れて前後も知らずなりしなり。

その時^{ゆのはな}袖花、^{はやしお}早潮は^{なつめ}夏女、^{てりうそ}照鷲、^{ひぐま}日熊、^{たつま}龍間と^{としのよ}諸共に仕合わせ良しと^{さざめ}さざめいて、^{こうちんぼく}船を^{つか}江鎮泊に漕ぎ寄せてかくと^{としのよ}注進したりしかば、^{つか}小蝶、^{としのよ}大箱らは喜んで^{てりうそ}除夜を迎えの為に^{はやしお}乗り物を^{ひぐま}遣わしけり。

これにより^{ゆのはな}袖花、^{なつめ}夏女らは^{としのよ}船より^{てりうそ}除夜を助け上げ、その^{はやしお}乗り物にうち乗せつつ^{ひぐま}照鷲、^{たつま}早潮、^{としのよ}日熊、^{しず}龍間と^{とりで}諸共に^{しず}除夜の乗り物をうち守り、^{とりで}道を急いで^{しず}賤の^{とりで}砦に帰り来にければ、^{げやく}小蝶、^{としのよ}大箱、^{としのよ}呉竹は急がわしく立ち出て、まず^{としのよ}除夜をそのまま^{ちゅうぎどう}忠義堂に助け入れさせて^{おおかた}解薬を注ぎ飲ませしかば、しばらくして^{としのよ}除夜はようやく我に返って^{おおかた}辺りを見つつ、且つ^{いずこ}いぶかり、且つ^{おおかた}驚く事大方ならず、「そもそもここは何処ぞや」と問えば^{ゆのはな}袖花は進み出て、

「^{やうめ}槍梅の^と刀自、^{ちゅうぎ}許させたまえ。忠義の為に^{ゆうふ}止む事を得ず、^{おんみ}勇婦たちと示し合わしてうまく^{おんみ}御身をたばかって、^{しび}痺れ^{ぐすり}薬の^え酔いの内に^{さんせひめ}伴い来ぬる此の所は^{おわ}三世姫の^{しず}御座します^{とりで}賤の^{としのよ}砦ではべるかし」と云うに^{としのよ}除夜いよいよ呆れて、

「さては^{おんみ}御身は^{こうちんぼく}江鎮泊の^{ゆうふ}勇婦の群れに入りたるよ。そも何故に^{わらわ}たばかって、私をここに^{わらわ}伴いしぞ」としきりに問えば、^{はやしお}早潮、^{なつめ}夏女、^{てりうそ}照鷲も^{ゆえ}諸共にその^{かよう}故は^{かね}斯様斯様と^{はか}予て^{ごと}軍師^{はか}呉竹の^{ごと}謀り事に従って、^{おもむき}おびき寄せたる^{いらぶしじゅう}事の^{としのよ}趣の一部始終を^{おま}告げ知らせれば、又、^{としのよ}小蝶、^{としのよ}大箱も^{としのよ}呉竹と^{としのよ}諸共に^{としのよ}除夜にうち向かって、

「我々^{おんみ}御身をたばかせて、^{おびき}おびき寄せしは余の儀にあらず。此の度都よりの^{ふた}討手の^{おんみ}大将二つ^{おんみ}鞭芍薬の^{かまやり}連環馬を破らんには^{おんみ}鎌槍にますもの無し。しかるにその^{おんみ}槍をよく使う者は^{おんみ}御身ならで絶えて無し。この^{ゆえ}故に^て手立てを^{おんため}巡らし、かくは^{おんため}味方に引き入れたり。願うは世の為、君の^{おんため}御為に我々を相助けて、彼の^か連環馬を破りたまえ。都の^{かめざく}亀菊、^{よしとき}東の^{さんせひめ}義時、二人の^{さんせひめ}悪魔どもを^{さんせひめ}討ち滅ぼして、三世姫だに世にいでたまえば我々の願い足れり。この儀を受け引きたまえかし」と^{まこと}真を表し言葉を尽くして皆々ひとしく^と説き進めしかば、^{としのよ}除夜はその^{ちゅうしん}忠臣を感じて^{いな}今更^{いな}否む由も無く、つくづくとうち^{おんため}案じて

「^{おのおのがた}各々方の^{おもむき}云われる^{ちゅうぎ}趣は元これ^{いな}忠義の^{わらわ}為とあれば、今更^{わらわ}否むにあらねども、私^{わらわ}が此の^{とりで}砦に留まって都へ^{まい}帰り参らずば、その^{おとが}御咎めは^{おおかた}大方ならず^た祟りは^{じゅうらい}徒類に及ぶべし。家に^{めのと}残せし^ま乳母^ま夫婦の^ま真^ま金井^ま味噌^ま太夫、その^{こしもの}妻^{のめ}お針、並びに^{わらわ}腰元^{つか}鶺鴒^{つか}野女らは此の年頃^{つか}まめやかに私に^{つか}仕えし者なれば、いと^{ふびん}不憫に思うなり」と云うを^{つか}大箱^{つか}聞きながら、

「その儀は心易かるべし。^{かね}予てその事も思うにより、^{つか}昨日都へ人を^{つか}遣わして^{かよう}斯様斯様に^{おんみ}計らせたれば、^{おんみ}御身の^{けんぞくじゅうらい}眷属徒類を迎え取って来べきなり」と^ま答える言葉も未だ^ま終らず、^ま魔利^ま支^ま天^ま紺^ま太郎は四五

十人の雑兵を従えて、彼の味噌太夫、お針、鶺鴒野女らを始めとして全て除夜の家に使える水仕女、下部は更なり、家の什物、衣装、雑具を一つも漏らさず取り持たして、急がわしく帰り来て、すなわち小蝶、大箱にしかじかと告げにけり。

その時除夜は味噌太夫、お針まで、ここへ来ぬるをいぶかって、その故を尋ねるに、味噌太夫、お針ら答えて、

「昨夜使廳より捕り手の役人が数多来て、除夜は病と偽り、都を出て返らざる由は既にその聞こえあり。これにより詮議の為に従類を絡め捕りに▼向ったりとて、一人も余さず縛めて厳しく引きもて行かれしは昨夜の事で候いしに、使廳へは具しても行かず大津より船に乗せられ、此の所へ伴われしを心得難く思いしに、あなた様も又、ここに御座しますこそ不思議なれ」と云うに呉竹は笑いつつ、

「それも私の謀り事にて、捕り手の頭人、組み子らと見せしはこちらの回し者にて、合砥礪の新玉の夫なるこれこの紺太郎に多く雑兵をさし添えて、和殿たちを迎え取らせたり。その故は斯様斯様」と除夜を江鎮泊へおびき寄せて味方になさんと思うによって、柚花らに謀らせたりし事の由を説き示せば、紺太郎も又、進み寄って、

「それがし昨夜、此の人々をたばかって絡め捕り、家具雑具を運び取って家には火を掛け焼き立てたれば、除夜殿はいかばかりに思いたまうとも今更に立ち帰り難かるべし。そを又、都へ帰りたまえば、たちまち真の祟りに会って、命を保ち難からん」と云うに味噌太夫、お針らは更なり除夜はいよいよ呆れて、

「此の上は是非に及ばず、長く三世姫の味方となって習い覚えし鎌槍を諸軍兵に教ゆべし」と云うに小蝶、大箱は斜めならず喜んで、やがて酒宴を設けつつ除夜をもてなす程に、蕃、桜戸、花的、秦名らの諸勇婦も全て除夜に対面して共に盃を巡らしけり。

かかる所に都、難波へ赴きたる八重機の彩雲、呉藍の山桃は大石火矢に用うべき硫黄、煙硝などを多く買い求めて帰り来るに、又彼の柚花の教えを受けて鎌槍を作る鍛冶らが昼夜を分かず急ぎしかば、既にして数千筋の鎌槍を作り出しけり。

これにより除夜は味方の軍兵に槍を使う技を教えるに、これも昼夜を分かざりければ未だ三十日を経ざる程に、こと如く調練せし由の聞こえあるにより、大箱は小蝶と共に除夜の槍の手練を見聞きせしに、その技真に世の常ならず、いかなる堅陣連環馬なりともたまるべくも見えざりければ、感ずる事大方ならず。「いざさらば押し寄せて、無二の勝負を決せん」とて三十余員の勇婦と共に此の度も三千の軍馬を進めて、早静々と押し寄せけり。

○さる程に二つ鞭芍薬は先に味方の女大将沢蟹、打出の両人が敵の虜になりしかど、しばしば勝つに乗るをもて、いささかも気を屈せず、相撲捉草韓藍と諸共に江鎮泊を攻めんとするに、大箱は固く守ってあえて出て戦わねば、しばらく本陣に退いて人馬の足を休めつつ、思わずも日を送る程に忍びの雑兵が走り帰って、

「大箱がまたまた呉竹、桜戸、花的、秦名ら数多の勇婦と共に三千余りの兵を従えて押し寄せ候」と告げしかば芍薬は漫ろに喜んで、

「そは願う所なり。敵に足を溜めさせず、逆寄せして討ち破らん。いでいで」と云いつつも五六千の軍兵をやがて二手に分ちつつ、韓藍を先手の大将として、その身はすなわち後陣にあり、彼の

連環馬を押し連ねて湖水の辺にうちいでたり。

かかりしかば韓藍は連環馬を前に備えて、大箱の本陣へ無二無三に突いて掛かれれば、江鎮泊の先手の大将旋風力寿、天目子沢蟹は五百余りの徒武者をもて開き合わせて討たんとす。その時韓藍は沢蟹をきっと見て、怒りに耐えず声苛立てて、

「未練の匹婦がおめおめと、賊に下ってあまつさえ、天兵に敵するや。まず汝より生け捕って天罰思い知らせん」と息巻き猛く攻めたてる連環馬の勢いに誰かはあえて当たるべき、大箱の先手の軍兵は散々に突き崩されて、逃げるをすかさず韓藍は味方を進めて追う程に、一群繁き森陰より敵の伏せ勢一度に起こって、鎌槍をもて縦横無碍に馬の足を掛け倒し、或るいは突き伏せ突き崩す、勢い当たるべくもあらざりければ韓藍の連環馬はたちまちに破られて、三千余りの軍兵も残り少ないに討ち取られ、多くは虜にせられしかば、韓藍大きに驚いて只一騎のみ馬を引き返し水際をひたすら走る程に、水草繁き所より再び伏せ勢どっと起こって、鎌槍をもて韓藍の馬の足を掛け倒し、落ちるを大勢折り重なって押さえて縄をぞ掛けにける。

○されば又、芍薬は三千余りの軍兵を従えて、此の時後陣に在りけるが、韓藍が深入りして生け捕られたる由をほのかに聞きつつ驚き怒って又、連環馬を先に備えて、まっしぐらに押し寄せれば、大箱の陣より女弓取花的と名乗りつつ二三百の雑兵を魚鱗に備えてさえぎり止めるを芍薬は物ともせず味方を進めて叫いてかかれれば、花的の一手の兵は散り散りに討ち破られて、山路を指して逃げて行くを▼なお逃さじとて追う程に、さえぎり止める二陣の大将迅雷秦名と名乗って、二三百の手の者を進めてしばし戦うものから、又、連環馬に突き崩されて同じ山路へ退いたり。

さてその次に桜戸、力寿は入れ替わり立ち替わり、芍薬と戦いつつ共に破れて逃げ走るを芍薬はちっともすかさず、此の勢いを抜かずして、大箱の本陣を討ち破り、皆殺しにして生け捕られたる韓藍を救い出さんとて真っ先に馬を走らせてひたすらに進めども、山路はことに道狭く木の隈岩にさえぎられ、思うも似ず進みかねしに、尾上を隔てて大石火矢をしきりに放つ音すさまじく、天地に響いて聞こえしかば芍薬は齒を食いしばって、

「あれは必ず打出が賊婦に下って味方を討つ、筒音にぞあらんずらん。憎し彼奴を生け捕って、ずたずたに斬り離させずば我が憤りを晴らし難し。皆々進め」と鞍を叩いて、なおも追わんとする程に、後より雑兵が走り来て、道に遅れたる味方の連環馬は敵の伏せ勢にさえぎられて、いよいよ進みかねたりしに、思い掛け無き後ろより槍梅枝除夜が鎌槍を持たせたる七八百の兵をもて、旋毛の如くどっと起こって馬の足を掛け倒し、息をもつかせず攻めたりければ、一千余りの連環馬は将棋倒しに掛け倒されて、討たれる者、生け捕られる者は幾百人と云う数を知らず、三千ばかりの味方の軍兵は逃れる者は稀にして、「敵は後より押し寄せ来たれり。さあさあ退きたまえかし」と告げるに芍薬驚いて、馬の轡面を引き返して退き去らんとする程に、大箱は呉竹らと諸共に高き山の頂きより此方を遙かに見下ろして、小旗を取って指し招けば、山路の方より力寿、岩飛葉、袖花、照鷲、早潮、白粉ら、数多の軍兵をかり進めて、漏らすまじともふだりければ☆、芍薬の手の者は残り少なく討ちなされて麓を指して退く程に、行く手の方より除夜、桜戸、花的、秦名の四人の勇婦らが勝ち誇りたる軍兵にて稻麻※の如く取り囲み、引き挟みてぞ攻めたりける。

されども予て大箱を生け捕って味方に付けんと思ひしかば、諸手に下知して矢を射させず、此の故に芍薬は薄手だも負わざりければ、近づく敵を薙倒し、斬り払い、囲みを逃れて只一騎で信

濃路を指して落ちのびけり。

※稻麻(とうま):イネとアサ。

○さる程に大箱は思いのままなる勝ち戦して、馬を得たる事一千五百余匹、生け捕りの雑兵八百余人、この余、弓矢、物の具はその数を知らず、芍薬が本陣に蓄えたる兵糧をも多くこれを得たり。且つ先に生け捕られたる味方の雑兵が未だ都へ引かれずして陣中に繋がれしをこと如く救い出して、勝ち關三度上げさせて江鎮泊へ凱陣せしかば、小蝶は著らと諸共に港近く出迎えて、忠義堂に酒宴を設け、雑兵に到るまで物を取らせる事、各々品あり。

除夜を第一の軍功として重く彼女を賞しけり。その時大箱は生け捕りたる韓藍の縛めの縄を解き捨てて、小蝶、呉竹らと諸共に言葉を尽くし説きすすめて、三世姫に仕えたまえてその道理を述べしかば、韓藍は小蝶、大箱らの忠義の志を深く感じて遂に降参したりける。▼よって又、江鎮泊には除夜、打出、沢蟹、韓藍の四人の勇婦を相加え勢いいよいよ盛んなり。

○されば又、二つ鞭芍薬は頼みきったる連環馬の軍陣を大箱に破られて、味方の大将韓藍は敵の為に生け捕られ、数多の軍兵は或るいは討たれ、或るいは虜となつて、その身一騎に討ちなされしをようやくに逃れたれども、此のまま都へ帰り参らば敗軍の罪を逃れ難し、ひとまず近国に赴いて軍兵を狩り催し、再び江鎮泊を攻めたいらげて、此の度の恥を清めんと思案をしつつ、只一騎で信濃路指して走りけるが、信濃の国司越中之介茂孝は予て相知る仲なれば、この人をこそ頼まめとて木曾の馬籠へぞ赴きける。

されば此の時、信濃の国司と聞こえたる踏通越中之介茂孝は元これ越中の国司なりしに、花的、秦名の事よりして公の御沙汰がよろしからず、しばらく任国を止められてうち籠もって在りけるが、年頃亀菊と親しかりしかば、ようやくにこしらえて更に信濃の国守に任せられ、遂に一国の賞罰を司って馬籠に在城したりけり。

さる程に芍薬は行くこと只一日にあらず、既にして信濃の木曾の熊ヶ原に来にける時に早黄昏になりしかば、「今宵はここに宿りを求めて、明日とく馬籠に到らん」とて、やがて道の辺なる一つ家の門に馬を留めて一夜の宿を乞いけるに、此の家の主人が立ち出て事の由を尋ねるに、江鎮泊へ討つ手に向かいし女武者の敗軍により来る由なれば、且つ驚き且ついたわって家の内をかき払い、芍薬を座敷に居らして懇ろにもてなしけり。その時芍薬は主人に向かって、

「我が乗って来る馬は院の御所より賜りたる雪獅子と云う名馬なり。馬草を飼って馬屋に引き入れ、いたわり呉よ」と頼みしかば、主人は心得て、かたの如く馬を厩に繋ぎけり。かくてその夜丑三つの頃に背戸の方に人あって潜めく様に聞こえしかば、芍薬これに驚き覚めて、窓押し開いてうかがうに遙か向かいに松明の光がちらちらと見えしかば、急に主人を呼び覚まして斯様斯様と告知らせるに、主人も又、いぶかって、共に外の方に出て見るに馬屋に馬は無かりけり。

その時芍薬は驚き怒って、

「さてはあの盗人らに我が馬を奪い取られたり。いで追っかけて引き捕らえん」とて逸るを主人は押し止めて、

「不知案内なる夜の山路をよしや追いかけたまうとも、いかにして及ぶべき。思うにあの盗人らは安計呂の山より来るなるべし。ついて一下りの物語りあり。御心得の為に話し申さん。そもそもこ

こより程遠からぬ安計呂と云う深山の砦に山賊の大將二人あり。しかも彼女らは女にて、第一の頭領を人寄せの友代と呼びなしたり。さてその次の頭領を▼億乾通お犬と呼びなして共に万夫不当の武勇あり。五六百人の手下を集めて国司の下知に従わず、富みたる者を脅し、兵糧を求め、或るいは金銀を求め、或るいは旅行く人を引剥ぎして年頃を経たれども、国司も彼女らを制し得ず、ここをもておのがままに振る舞わずと云う事無し。されば彼の友代、お犬の手に従う小盗人らが御身の馬を奪い取り、必ずその頭領へ引きもて行くにぞあらんずらん」と語るに芍薬は嘆息して、「さてはここにも女の賊の頭領が在りけるよ。我が明日馬籠の城に到らば、まずこの由を国司に告げて、討ちたいらげて奪われたる我が彼の名馬を取り返さん。既に馬を失っては一人馬籠へ行き難し。そなたは私の供をして、明日彼処まで送れかし。賃金は望みに任せん。まずよくこの儀を心得よ」と云うに主人は一議に及ばず、その明け方に飯を炊いで早く芍薬に進めしかば、芍薬は髪をとり上げ姿を繕い、さて主人には宿銭と雇い賃さえ多く取らせて鎧を負わせ薙刀を持たして、馬籠の城へ赴いて宿の主人をば帰しけり。

○さる程に踏通越中之介茂孝は予て相知る芍薬が大箱との戦いに利あらずして、逃れて一人来ぬる由をうち聞しより驚きながら迎え入れさせて対面しけり。その時芍薬は敗軍の事の趣を斯様斯様と告げ知らして、

「いかでちどの軍兵を御身に借りて会稽の恥※を清めんと思いつつ、この地を指して来る程に、昨夜熊ヶ原の宿りにて秘蔵の名馬雪獅子を盗人に奪われたり。その盗人らは安計呂の山の友代、お犬と云う女の山賊の手下ならんと様子を知って告げたる者あり。かかればまず彼の山の山賊どもを討ち平らげて雪獅子を取り返し、その後又、江鎮泊を攻め討ちて、大箱らを生け捕るべし」と云うに茂孝領いて、

「その儀真にしかるべし。知られる如くそれがしは越中の国の守護たりし時、花的、秦名らの逆心により江鎮泊へ走りし故に京鎌倉の首尾よろしからず、彼処の守護を召し返されて閉じ籠もってありけるが、ようやくに恩免を被り、当国の守に成されたり。これにより彼の賊婦、友代、お犬らの事もその聞こえあるをもて、絡め捕らばやと思ひしかども彼女らは手下が数多あれば、容易くは討ち向かい難かり。故にしばらく捨て置きたるに、和女郎は自ら我に代わって征伐せんと云われるは思い掛け無き幸いななり。軍兵の儀は心得たり。まずまず休息したまえ」とて俄かに別間をしつらえて、朝夕の給仕には腰元両三人を付け置いて懇ろにもてなしけり。

※会稽の恥(かいけいのはじ)：[中国の「史記」にある故事から] 敗戦の恥辱。他人から受けたはずかしめ。

○かくて芍薬はその次の日より、茂孝に対面する毎に安計呂の山賊を退治せんとて、しきりに催促したりしかば、茂孝すなわち千五六百の人馬を調べ、これを芍薬に授けて、安計呂の山賊を討つ手の大將にしてその砦を討たせたり。芍薬これに心勇んで、その軍兵を引率しつつ、安計呂の麓へ押し寄せて堅固に陣をぞ取ったりける。さる程に人寄せの友代、億乾通お犬は先に花殻の妙達を留めたる折に彼女は友代らが吝嗇(けち)なるを▼ひどく憎んで物を奪って立ち去りし後も、いよいよ多く手下を集めて隣郡近郷を脅かすと云えども、前後の国司は懦弱にして知らざる如くにうち過ぎしかば、いよいよ忌みはばかり事無く欲しいままに振る舞いしに、ある日忍びの小盗人が慌ただしく走り帰って、

「此の度江鎮泊の戦いに討ち負けたる討つ手の女大将二つ鞭芍薬と云う者が一人国司の城へ逃れ来たりしを国司茂孝は幸いと喜んで、彼女に数多の軍兵を貸し与え、この砦を征伐せしむ。これにより芍薬は一時にこの山を攻め破って、去ぬる夜に盗み取られたる秘蔵の名馬雪獅子を取り返さんとて既に間近く寄せ来たり。御用心あれかし」と息付きあえず注進す。

お犬はこれを聞きながら、

「あな物々しや。その芍薬めが、いかばかりの手並みがあるべきか。さあ討ち向かうて生け捕り来てん。者共早く用意をせよ」と勢い猛く陣触れして、ひしひしと身を固め、早討ちいでんとしてけるを友代は急に押し止めて、

「そは、はなはだ危うき業なり。彼の芍薬は都の女武者頭にて鉄の鞭二つをよく使う勇婦と聞きぬ。そを生じいに出て戦えば、多く味方を討たるべし。堅く守っていで会わず、彼女が倦み疲れる時に討てば必ず勝利を得ん。逸るは要無き事なるべし」と言葉せわしく諫めしをお犬は聞かず声を振り立てて、

「さては姉御は芍薬の武名に聞き怖じせしならん。我が生け捕って、引きもて来ぬるを静かにここにて待ちたまえ」と強かにたしなめて、三四百人の小盗人を馬の左右に従えて麓を指して討つていざれば、早芍薬も押し寄せて、互いに罵る戦の広言。その中に芍薬は馬を真っ先に進めつつ、「女に似気無き山賊ども、我が雪獅子を早く返して縄に掛かれ」と罵れば、お犬も怒りの声高く、「江鎮泊にて不覚を取って、命惜しさにこの地まで逃げて来たる臆病者に手並みを見せん。覚悟をせよ」と罵りつつ進み迎えて、戦う事十太刀に到らずにお犬は大刀風衰えて叶うべくもあらざれば、馬を返して逃げ走れば、相従う小盗人は驚き騒ぎ乱れ立ち、討たれる者も少なからず。お犬も既に危ぶかりしをようやく免れて安計呂の山へ逃げ籠もり堅く守って防ぎしかば、芍薬も人馬をまとめて本陣へぞ退きける。

その時お犬は芍薬の武勇に敵し難き由をつぶさに友代に告げ知らせ、いかにすべきと談合するに友代はしばらくうち案じ、

「御身は我が諫めを聞かずに手の者多く討たせしかば、今更自力にては勝ちを取り難し。予てほのかに伝え聞きしに、花殻の妙達は青嵐の青柳と云う勇婦と共に年頃河内の金剛山に在り、その後彼の虎を手討ちにしたる女行者竹世も加わって、手下の兵七八百人ありとなり。彼処へ使いを遣わして加勢を頼めば芍薬を討ち取らん事易かるべし」と云うをお犬は聞きながら、

「そは云われる事ながら、河内へは遙々にて、只今の用には立たず、且つ妙達は去ぬる頃に我らを疎み、物を奪って逐電したる事あれば、頼むと云うともいかにして遙々加勢に来べけんや」と云えば友代は微笑んで、

「否、妙達は▼猛しと云えども心は返って素直にて、旧悪を思う比丘尼にあらず、頼まば必ず受け引いて我々を救うべし。且つ河内は遠しと云うとも百里二百里隔たりたるにあらず。急がばおよそ十日の内に行き帰りはなるべきなり。その内は堅く守って出て戦う事無くば、芍薬が万夫の勇婦にもせよ、いとも険しきこの山を容易く攻め破るべくもあらず。これより他に詮方無し」と思い入りつつ説き諭せばお犬もこの儀に従って、

「さらば使いを急がんとて、まず妙達らへ遣わす消息(手紙)一報を書きしたため。さて道中の賄いとして金三百両にちとの土産を差し添えて、腹心の小盗人のことに足早き者両三人を選んで河内へ遣わす使いと定め、贈り物を渡し、口上を説き示して、金剛山へぞ遣わしける。

この時こんごうさん金剛山のとりで砦には妙達、青柳、竹世の三勇婦が七八百の兵を集めて威を近郡に振るう程に、山盛のお剛もその身の宿所を捨てて、此の砦の群れに入りぬ。又、二藍の紫苑はその親が身罷りしに、竹世が数多の人を殺して逐電したる巻き添えの罪を恐れ、これも河内へ逃れ来て金剛山に留まりけり。又、山水天狗損二郎、花圃の青芝夫婦も予て竹世と約束なれば、彼女を縁に河内に来て妙達らに従いける。

かかれば妙達、青柳、竹世の他に紫苑、お剛、損二郎、青芝の四人の者どもが相加わって勢いいよいよ盛んなり。▼

かかる所に、ある日信濃の安計呂の山より友代、お犬の早打ちの使い来て、事の由を告げ知らせ、並びに友代、お犬の連名の消息と金三百両を贈って戦の加勢を頼みければ、妙達はその消息を青柳に読ませ聞き、

「今友代らが事の難儀に当たって遙々加勢を頼み起こせしに、その旧悪をなお憎んで彼女らの求めに応ぜずば、彼の芍薬の武芸に恐れて行かざりきと思われん。早く彼の地に赴いて、芍薬を討ち滅ぼして友代、お犬を救わんとて、紫苑、お剛、損二郎、青芝を残し留めて金剛山の砦を守らせ、青柳、竹世と諸共に手勢五百人を従えて信濃路指して立ちいでけり。これより後の物語りは下帙四巻きに著すべし。目出度し、目出度し。」

(傾城水滸伝) 女水滸伝 十三編ノ三 笠亭仙果編次 一陽斎豊国画
1850年 かのえいぬ 嘉永三年 庚戌春新板 東都両国大黒屋平吉板

さても信濃の国の安計呂山には金剛山の尼妙達、その余の者ども味方して討ち立ったりと聞こえ、友代は手下のこねず人☆を引き連れて山を下り、芍薬の陣を目掛けてまっしぐらに突き掛かる。芍薬は大きに怒り大雑刀を振り回して進み出て、友代に向かえばやがて刃を交えるに友代も優れし敵なれど、未だ十合にも及ばずして力衰え太刀筋乱れ、「此は叶わじ」と逃げ行くを芍薬は逃すまじとぞ追っかけて、山の根まで到れば、山の上よりしてお犬が予て積み置きたる木石を雨の如くにうち落とせば、芍薬は山に登り得ず、馬を返して退く折しも軍中俄かに騒ぎ立ち、「後ろを襲う者あり」と後陣の者より知らせれば、「さは誰ならん」と芍薬は後ろへ回って見渡せば、一群れの女武者が馬を早めて駆け来たる。

真っ先なるは白馬に跨がる尼法師、虎が荒れたる勢いして、
「汝、芍薬。賊が岳を追い払われしに懲りもせず、ここに到って我が友達を犯さんとする命知らず。我が鉄棒を受けて見よ」と叫んでかかれば、芍薬は
「何を小癩な、さあ来い」と鉄杖、雑刀うち交え、互いに龍虎の勢い鋭く秘術を尽くして戦う程に、勢い益々加わって、八十余度も打ち合えども、更に疲れし様は無し。

芍薬心に驚いて、女武者が満ち満ちたる世にもかくまで勇猛なる者はあらじと感じつ、また十合も戦うに敵も味方も舌を震って酔いたる如く見とれしが、ようように心付き互いに過ちあらせじと、等しく鐘を打ち鳴らせば、二人はそのまま手を引いて陣に帰って息を付きしが、芍薬は再び進み出て、

「盗人比丘尼、さあ出て、勝負をせんず」と罵れば、苛立ち駆け出す妙達を押し止め、
「姉御前、しばし休らいたまえ。私が彼奴を生け捕らん」と代わって出るは青嵐の青柳。するりと太刀を抜きかざし、隙間も無く斬って掛かるを心得たりと芍薬は力を尽くして□みを尽くし、戦う事六十余合、

「又、この女もかくの如くに万夫に優れし勇婦たり。いかなればこの山には斯様に猛き女どもがうち揃ってあるならん、さこそ名高き者どもならん」と芍薬再び驚くに、青柳も芍薬の武芸が世の常ならぬを見て感じ、馬を引き返せば芍薬も強いて追わず、その月は戦をせざりけり。

芍薬はこの山を只一攻めに攻め落とさんと思しには違いて二人の兵のあなどり難きに胸を悩まし一人吐息を付き居たりに、馬籠の城より使い来たり、

「ひとまず戦を収められ、城を守ってたまうべし。越後の高田の春日山に近頃より住まい為す、女盗賊長庚星黄昏、獨星の夕映の二人が数多の手下を従えて城下へ押し寄せ候なり。さあさあ帰らせたまえ」と云うに、良き引き潮と芍薬は陣を引いて▼馬籠へ帰りぬ。

次の日に妙達ら三人は勢い破竹の如くにどっとおめいて攻め寄せしが、敵の陣には人氣も無し。いかなる故ともわきまえぬ、折から友代、お犬の二人は山を下り三人を迎え入れて一味せし喜びを述べ、珍しき肴を徴(集め)して酒盛りし、心の限りもてなしけり。されば越後の黄昏、夕映はここへ押し寄せ来たる由をかいつまんでしかすべし☆。これも同じく春日山の麓に住んで、小金に富たる樽本粕九郎と云う百姓ありき。領主に内縁ある者にて常に筋無き振る舞いすれども、金にて司に賄ければ憎まれながらも敬われぬ。黄昏の母妙孔は近き辺りの寺へ詣でとぼとぼと帰り来るに、粕九郎は梅桜一つに咲いたる弥生の末、雪駄履くのも珍しく、参拝機嫌の遊山帰り、彼の妙功のついた杖が粕九郎の足の甲に誤って突き当たりたり。「さても憎き老いぼれめ」と詫びるも許さず胸倉取って、拳を上げてしきりに打つ。供をせし男女がささえるをも突き飛ばし、いとことなげなき振る舞いも少し云われの有る事なり。樽本の勢いには村長も頭を下げ、うやまはぬ者もなきに、女なれどもこの兄弟は目覚ましく憎く思い、しかじか物さへ云わざれば、粕九郎も心の内には腹は立てども、彼らに向かい叶い難きを無念に思い、かく老身をたしなめて、僅かに腹を癒すなるべし。

この時妹夕映はこの辺りの料理屋にて酒うち飲みて居たりしが、二階よりこの有様を見るより矢庭に飛んで降り、「かけがえも無き大事の母御に手詰めの折檻許されず」と粕九郎とって投げ退け、母を助けて、共にわたしあきあかっておさぶり付くを鉄拳を打ち悩ます粕九郎はそのままと逃げれば逃がしもやるべきをなまなか少し覚えたる生兵法はその身の仇にて、腰の一刀抜き離し、斬ってかかれれば夕映は「小癩な奴め」とその刃を奪い取らんと付け入る程に、誤って粕九郎は我が刀にて我が肩先を二三寸切り込んで、「人殺し、人殺し」と叫ぶに、夕映は是非も無く刃物を奪い取り、一打ちに大げさにこそ斬り下げたれ。

所の騒ぎ大方ならず、されども元より憎くおもいたる□の事にはあり、止む事を得ぬ▼夕映が災難を哀れんで取り押さえんと云う者無く、只わやわやと云うのみなれば夕映は騒ぎにまぎれ逃れ帰って、事の由を姉に語り、母を背負い山深く分け入って、しばし行方を隠しける。この所の目代はこの程しよくおうはれて☆、追い払われなどせし騒ぎに一度は厳しかりし詮索も何時しかに緩みし様子は聞き知りけれど、帰って住まはさすがにて、遂に春日の谷に籠もり、家を作って住む程に、成す事無ければ貧しくなり、力無く夜は里へ出て、引剥ぎして富みたる者を脅かし、金銀宝を掠め

取りしが、いつしかに二三百の手下集まり、ここもまた一つの砦とりでとなりけり。

彼の母の尼みょうこう妙功はその頃に死に失せけり。彼女が末期に云いけるはたった一人の我が弟ふみもち不身持まごめ(不品行)ゆえにところにもえをういで☆、十年以前都の方へさまよい行きしが、今は信濃の馬籠まごめに住み、鬢太郎びんたろうとて髪結い渡世。食うや食わずで居るとの事、女狂いが傷ばかりで正直な者なれば、呼び返したく思う内にこの次第でまだそれぎり。ついでも有れば形見心かたみごころで少しのこがね小金をやっても」と云い云い、遂に亡くなりしかば、二人は母の志を果たさんとて、手下の者に金と手紙をもたらせて、馬籠の里へ遣わしけるが、その者虚しく帰り来て、

「さてに□に□しき事にてはあんべえり。彼の里の水茶屋みずぢゃやの娘むなにお幣かと云う者が在りしが、三伊勢川みいせがわと云う相撲取りが彼の娘を盗み出し、産土うぶすな(産土神)の森陰にて押して身を汚させんとせしを娘は更に聞き入れず、いかに云えども放さねば、悲しさのまま鬢太郎殿かたみごころに借りしけが剃刀、懐ふところに持ち合わせしを密かに取り出し、相撲の脾腹ひばらを突き破りしが急所に当って相撲は落命、娘は慌ててその剃刀を取り直して我が喉刺し貫いて死に失せたりしを次の日人が見つけ出して公おおやけに訴えしに、鬢太郎殿は目代に恨みを受ける事あって、彼の剃刀を証拠と成し二人の者を殺したりと云いなして絡め捕り、しばしば厳しく責め問う由、お幣が相撲を殺せし時に通りかかって見し者なり。鬢太郎には罪は無しと下々は皆良く知れども証拠無ければ、毛を吹いて傷を求めんも益無しと嘆くのみにて、うち捨てて置く由を人が語りし」と告げるに黄昏、夕映は顔を見合わせ呆れしが、怒りに耐えかね、急がわしく小盗人に触れ知らせ、

「今より信濃へ赴いて馬籠の城を討ち落とし、叔父御を救い出すべし。かばかりの小勢にては本望遂げず。▼彼処にて討ち死にをすとも、ここにして安閑と日を送るに勝れり。第一親の志を遂げさせ申さぬものならば、不幸者になりぬべし。心得たるか」、「心得たり」と黄昏、夕映、先に立ち数多の手下を従えて、夜を日に接いで馬籠に着きぬ。

この時すなわち芍薬しゃくやくが帰り来たりし所にて、そのまま城の堀際にて、早合戦にぞ及びける。踏通越中之介えっちゅうのすけは櫓やぐらに上り見物すれば、まず姉黄昏は一文字の槍たそがれひつしごいて、一突き向かうを芍薬はあしらって二十余合も戦いしが城の主は見物せり。ハレの場所と芍薬は一入勇氣を励まして、戦う程に黄昏の槍を□ぎりの金縁にて遙かの横へ跳ね飛ばし、左の鞭を腰に挿し肘を伸ばして黄昏を引き寄せて、鞍の前輪に押し付けて馬の上にて生け捕りつ。「あら口惜し」と妹夕映、突きいでたれども、芍薬のぞう☆の金縁支えかね、手下を引き連れ逃げ走る。芍薬これを追い詰め追い詰め、数多の手下をうちなびき、また八方へ斬り散らし、勝ち鬨上げて悠然と城の内へぞ入りにける。

越中之介は黄昏を牢屋に入れて厳しく守らせ、芍薬をねぎらって、安計呂山の戦を問えば、「さよ、かく手に立つ者は無けれど、後に他より来たりし一群れのしかじかの者どもは侮り難き兵なり。必ず由ある女ならん」、越中之介は頷いて、

「その尼は甲斐の国、竹田の城の女武者、今剃髪して妙達と呼ぶ。いま一人は筑前の宰府に在りし、青嵐の青柳と云うて聞くなり。この他に竹世とて碓氷峠で虎を殺せし勇力無双の女あり。河内の国の金剛山の寺に籠もって威を振るえり。我、都に在りし時、河内の国主の手にも及ばず、▼おめおめ眺め暮らす由を人が語りしことありき。安計呂へ彼女らが味方しては由々しき大事起こるべし」とうち驚けば芍薬は

「実に実に左様の女なるべし。さりとも彼女らが武芸の高も私とはとくと見届けたり。遠からず生

け捕って、見せ申さん」と落ち着き居るにぞ、越中之介は頼もしく心を尽くしてもてなしける。

○姉をも捕られて、夕映はあだ名の一つ星となって、生き残りたる手下をまとめ、すごすごと退く折から林の内より一群れの兵こそ立ち出けれ。彼の大将を見れば、あにはからんや先つ年に別れたりし竹世なり。互いに馬より飛び降りて、絶えて久しき対面に夕映はそぞろに嬉しく、男勝りもむせ返り涙にくれるぞ道理なる。さてこうこうと在りし事を詳しく告げるに、竹世は驚き、我が身の上をも粗々語り、尼妙達、青柳共に安計呂の山の加勢に来たり。仇を容易く追い退け、ひとまず国へ帰らんと思いたったる所なり。芍薬の秘蔵の馬の雪獅子を友代らが盗み置きしをこの度の引き出物にいだしたるをこの通り後ろに引かせ一足先へ山を下りしが、余りに二人が遅きによって、ここにしばらく待ち居たり。云う間もあらせず妙達、青柳は轡を並べて、まゆませ☆来きたりぬ。竹世は夕映を引き合わせ、事の由を語り出し、

「安計呂山、春日山、金剛山、この三つの山の兵を一つに成して攻めれば、いか程堅くとも得持たじ。今一度安計呂山へ夕映殿を▼誘い帰り、事の由を云はん」と云えば青柳は頷きつつ、

「敵の強きを語るは藤沼の水鳥不覚☆には在るべきが、実に馬籠は堅固の城。芍薬は世の常の女武者とは同じからず、十分勝ちを取らんとならば、三つの山の軍勢にては未だ手薄き心地ぞする。承れば夕映殿は賊が砦に名も高き春雨の大箱殿とは縁あるこそ幸いなれ。彼の人をだに語らえば、必ず捨てて置かるまじ。彼処の兵を狩り出せば、馬籠の城をただ一度に微塵に為さんも難からじ。各々は何と思し召す」と云えば妙達は笑いつつ、

「よく気が付いた。そのことごと、陣議話☆になる時は一番かけに春雨の大箱、耳が疲れて痛い程、昨日も今日も一昨日も、大箱、大箱、大箱と蛙の呪い見る様に人の賞美をするのをおれば何でもかでも良い所ある女には相違無し。青柳殿の意見に従い返詞も早く近江へ行き、頼まれるが上分別」と云えば竹世もうち喜び、

「私も親しき仲なれば行けなら行くも易けれど、我が事は我がするのがりかた☆我らは安計呂に戦を調べ、吉左右(吉報)待たん」と云いければ、夕映はその親切を深く喜び、一礼し軍兵一人を共に連れ、近江路指して急ぎしが、日ならずして余呉の海の端に至って、酒店にしばらく休らい、賊が岳の砦の道を詳しく問うに、ここは近頃彼処よりたてそえたる酒店にて、主人は武蔵の広沢にて酒肴を商わせし鍼目衣枸橋にて、所の名は坂口と云えり。枸橋は夕映の姿がただの女にあらねば、ころにくくゆかしく思い、「賤の砦を問いたまうは誰を尋ねたまうぞ」と云えば、夕映は包むに由無く、「大箱の刀自」と答えると、枸橋は「さてこそ」と奥へ通し、懇ろにもてなして、船を仕立てて一つに乗り、しきりに櫓を掛け急がすに、程無く汀に着きければ、岸に上り砦へ行き、▼斯様斯様と云いいるれば、大箱はやがて出迎えて、

「絶えて久しき対面にも、懐かしかりし夕映殿。そもまた何の故により、遠くへ尋ねて来ませしか」と云われて夕映ははらはらと涙を流し、よよと泣き、しばし言葉もあらざれば、

「女伊達に似合わぬ涙はいかなる嘆きのある事か。どれほどの難儀たりとも見捨てはせねど、氣遣かわし。早よう聞きたい何事か」と問えば夕映は頭を上げ、春日山の谷に潜み盗人となつたより、無実落ちし信濃の叔父を救わん為に山を出て返って姉さえ生け捕られし始め終わりを物語り。竹世は又、妙達からの云いし事も落とさず告げ、叔父姉二人を救い出したまえば末代まで恩にきんと擦り壊すまで額を地に着け頼めば大箱は驚きつつ、

「それはさぞ腹も立ち、御心痛も最もなれどもさのみ心に苦しめたまうな。小蝶の刀自にまず会いたまえ」と奥へ伴い小蝶に引き付け、事の由を物語れば小蝶は未だ聞き終らず、

「妙達、青柳二人の女は夕映殿とは近づきならぬに、これさえその場で味方する。ましてお前は逃れぬ仲。返詞の猶予もなるまじけれど、近頃しばしば戦に出て少しの疲れは無しと云われず。此の度は留守して休息あれ。私こそ出陣せめ」と聞いて大箱は頭を振り、

「いつも申す事ながら姫上の御守りはあなたならでは誰がする。まして今度の一戦は只今仰せある如く、人に譲って見らるべきか。行かでは人も許すまじ。私の心も済む由は無し。願わくば私と共に各々力を合わせてたべ」と云えばその座に在りあう勇婦らは皆一様に異議無く受けが、早仕度にぞ掛かりける。

此の度は五手に戦を分かてり、まず先陣は花的、秦名、腐鶏。二陣は末広、夏楊、幸目、狩倉姉妹なり。中軍には大箱、呉竹、筒鳥、薄衣。四陣には節柴、朱良井、琴樋、下貝。五陣には杉木、山桃、大鳥と打出にて、これ二十騎頭として数多の人馬を前後に従え、次の日の暁に山を下って遙々と木曾路を指して急ぎける。

この時既に友代、お犬も妙達の陣に集まり、大箱の大軍が来たるを迎えて対面し、▼互いに篤く好を結ぶところへ紫苑、お剛夫婦も金剛山より馳せ着きければ、妙達しきりに勇みたち酒宴を設けてもてなしけり。

次の日大箱は合戦の模様を聞くに、

「その後五七度戦いしが未だ勝負は定まらず。但し敵は芍薬の武勇を頼みにするのみなれば、彼女をだに生け捕れば城を落とすは難からじ。ただ手強きは芍薬なり」と青柳が云いければ腐鶏はにっこりうち笑み、

「□のはな☆故に一度は江鎮泊も余程の騒動、されども最早未枯れし芍薬、さのみ手折るに骨も折れし、数多の人に傷付けて落花微塵と戦うより、斯様に成さん」と囁けば、大箱はやがてそれに従い、それより人馬の手分けして、その次の朝に戦を起し城に押し寄せ、四方を囲み旗ひるがえし、攻め鼓、えいやえいやの鬨の声は天地も崩れるばかりなり。

越中之介は色青ざめて、賊が砦の大箱さえもが敵に味方をせし上はちと難しと吐息を付けば、芍薬は騒がずあざ笑い、

「賊が砦の女どもは実に船戦は得手たるべし。岡へ上げては勝手違つて血を壊した河童も同じ、例の櫓に早く上って合戦の様子をご覧よ」と広言吐いて、物々しく薙刀携え軍兵引き連れ門外へ突き出れば、大箱の陣中より進み出たる一人の大將が声高やかに呼び張る様、

「汝、芍薬。戦に負けて散り際汚く逃げ隠れ、道知らずの悪人に身を寄せ、それが悪を助け恥を知らざる似非女。どの顔下げて我々に立ち向かうの□□□めが気の毒。この世の暇を取らせんと罵るを「そも誰なる」と茂孝は櫓より見下ろせば秦名なり。茂孝は大きに怒り、

「汝が敵に捕られて、逆賊に組みせし故に越中にも居り難く、ようよう近頃ここに移りけり。その遺恨は忘れ難し。よくこそここへ来たりたれ。辛き目見せんず。芍薬殿、生け捕りたまえ」と云いければ芍薬は一議に及ばず馬を躍らせ、大薙刀をただ一薙と討ちかかる。秦名は好みの狼牙棒、更に勝負を分かたねば、もし芍薬に怪我もやあらんと茂孝は急がわしく鐘鳴らさせれば、芍薬は

残り惜しくは思えども敵うち捨てて退けば、秦名もかってこれを追わずに相引きに引きければ、大箱は下知を伝え遙か隔てて陣を取りぬ。

芍薬は主人に向かい、

「今少しにて勝つべきものを引けとの鐘はお情け無し。もはや秦名の手並みも見抜きぬ。明日は容易く生け捕らん」と事も無げに云い落とせば越中之介は

「なおいわくよし。彼女一人に勝つとても目に余る他の敵。都へも注進▼とまりとにへ☆も告げ知らせ、救いを乞うべき使いの者。ともかく明日はさしたてたし。一方二方斬り散らし、道を開きたまうべし」と云い云い書状を書きしたためるに、その夜も何時しか明けれどもなお隈々は小暗き程、物見の兵が来たって云う様、

「北の門の向かいに辺り小高き丘の林のもとに密かに来たりし様子にて、敵の大將ただ三騎で此方の城をあくまでもうかがい見て、顔き合いつつ何やらん囁き居たり。まず一人は年も若く見覚えある花的なり、一人は白き馬に乗り紅の衣を着たり。いま一人は具足は着ずに被布様の物を着て、檳榔子の団扇を持てり。密かにご覧あるべし」と告げれば芍薬は櫓に上り、

「紅き衣は大箱にて、団扇を持てるは呉竹なり。構えて驚かすべからず。我行って不意を打たん」と忍び門より軍兵を密やかに繰り出し、横にひへ☆回れども三人はひたすらに城の内をうかがい見て、さらに余念も無き様なれば、「してやったり」と馬を進め間近く寄ると、ひとしく伏せ勢が一度に起こり立ち、耳を貫く関の声、「此は謀られたり。口惜し」と道を求めて退く程に、いつの間にかこしらえけん大きな落とし穴が有るとも知らず乗りかかり、馬諸共にどうと落ちれば数多の兵が駆け寄って、騒ぐ味方を斬り散らし、芍薬を穴より引き上げ折り重なって縛めるを支える者は花的が差し詰め引き詰め出す矢に数多の命を落としけり。

大箱らは陣所に帰り、いつもの如く芍薬の縛めをも大箱は手づから解き捨てて、礼儀を篤くし、いと懇ろになだめつつ、亀菊と義時の非義非道を数えたて、忠義を尽くして三世姫を守りたてまつる志を小蝶、呉竹諸共に涙を含んで物語り、じつぎ☆おもてに現るれば、芍薬はいと久しく物をも言わでありけるが、道理に賢く賢ければ、心に心を問答して、遂に心を翻し、三世姫の御為に忠義を立てんと誓いければ、各々いたく喜んで、皆、盃を取り交わしぬ。

彼の名馬の雪獅子は始め友代が奪い取り、後に妙達に贈りしを、大箱この馬を請い取って芍薬へ返しければ、芍薬はいよいよ心を傾け、大箱の計らいの情け深きに感服しけり。

さていかにして城を落として黄昏らを救わんと、各々頭を傾ければ、

「芍薬殿の働きにて、城戸開かせるの他は無し」と呉竹は心を作れば大箱は芍薬に▼

「私が輩(仲間)にこの城を取るべき望みは絶えて無し。この夕映の姉と叔父を救わん為の戦なりとて始め終わりを物語り、謀り事を囁けば、望む所のひと働き、降参なしたる証拠にはこれ究竟と催促を受け引いて、花的、秦名を始めとして十人の勇婦を雑兵にいで立たせ(扮装させ)、その夜、芍薬が先にたって十人を後に従え、大箱の陣で馬籠の城の堀際へ駆け付けて声を上げ、「さあさあ城戸を開けたまえ。芍薬、辛き命を助かり。今帰りし」と呼び張れば越中之介が聞き付けて、死んだる者が蘇りたるが如くに喜び勇み、例の櫓に馳せ上り、

「既に虜となられし御身。よくつつがなく帰られしぞ。但し、さいか☆に連れられたかは何者ならん」といぶかれれば、

「これは先に生け捕られ、さに降参なしたる雑兵。これらの助けを得たればこそ、彼処を抜け出て

馬さえも奪い返して候なれ」と欺かれても心はつかず、櫓を下って馬に跨がり雑兵に云い付けて、城の門の堅扉を何心無く開けさせけり。

(傾城水滸伝) 女水滸伝 十三編ノ四 笠亭仙果編次 一陽齋豊国画
1851年 かのえいぬ
嘉永四年 庚戌春新板 東都両国大黒屋平吉板

芍薬はうまうまと城の門を欺き開かせ、先に進めば十人の女も続いて矢庭に駆け入り、秦名は好みの狼牙棒を一振り振って、茂孝を馬より下へ打ち落とせば花的やがて首を取る、「すわ、夜討ちぞ」と数多の兵が慌て騒いで群がり来るを燕、腐鶏、筒鳥、末広、夏楊、大鳥などが当たり任せに斬り伏せれば、幸目、狩倉二人の者は所々へ火を放つ。大箱は城の内に火の手が上がるを見澄まして、大軍どっと押し寄せて一度に城へ込み入つたり。

その時大箱は下知を伝え、

「女、童、老いたる男女、罪無き者を損なうな。心を付けて落としやれ」と嚴重に触れ知らせ、まず獄中を探させて、鬢太郎と黄昏を救い出させていたわらせ、蔵を開いて金銀財宝をことごとく奪い取り、我が陣へ運び入れさせ、火の災いを被りし百姓どもへは数多の黄金を与えてこれを慰めつ、得たるところの兵糧、武具、馬具を書きたるに、その数を知らず。

されば妙達、友代を始め、三ツの山の者どもは皆々ひとしく心を合わせ、賤の砦へ加えられ、姫上にに忠義を尽くし、仕えたてまつらんと、各々誓いを立てければ、大箱、呉竹その余の者の喜びまた類い無く、うち連れ静々と近江へ帰りぬ。

芍薬、妙達、青柳、竹世、紫苑、お剛、損二郎、青芝、友代、お犬、黄昏、夕映ら、十二人の新参るを▼大箱はまず小蝶に引き合わせ、諸々の勇婦らに対面させ、三世姫に見えさせ、互いに睦を結ばせけり。

桜戸はいにし年に長枝原にて危うき命を助けられしを語りいで、再び会って末永く共にここにて暮らさん事は浅からぬ縁なりと妙達と差し向かい、そぞろ涙に暮れければ、青柳は小蝶に向かい摩耶山の事を語り出し、

「しばらく拝み申さぬ間に姫上様のご成長は見違える程で御身大きくお美しくしうならせられ、御目元のあの凛々しさ。定めて信季へ忠義立てして、鎌倉へ我を殺しに連れ行きけん。小蝶の刀自、かうははれずば☆、如何で今まで長らえてこうした栄えは見らるべき。どの顔下げて青柳は目見えしたぞと姫上はさぞ疎ましく思されけん。よく取りなしてたまわれ」としきりに顔を赤めれば、

「それもこれも邪の心でした業にもあらず。それを何時まで姫上がしうねく恨みたまうべき。心に掛かるも無理ならねば、人にも増してこれからは忠義を尽くしたまうべし」と諭されて青柳はようよう心落ち着きけり。

○月に増し日に増して、江鎮泊の勢いは朝日の昇るにさも似たり。されば袖花に指図させて武具、馬具、数々造らして、抜糸には衣服の他、幕、旗、差し物をあつらえさせ、山陣の四方には高さ台を新たに築かせ、菅野浦と坂口の他にも最寄りの船着きに更に二軒の酒店を営んで、青芝夫婦、新

玉夫婦の慣れし業とて主人と定め、いよいよ世間の風聞を手広く細かにうかがわせ、天の下の義婦烈女、忠義の女を招かしむ。

これよりすげつ事も無く各々明かし暮らしけるが、ある日妙達が云いけるは

「我に一人の友達あり、浮潜龍衣手と云えり。信濃の国の水内の郡女郎花村の住人なるが、心ならずも戸隠山の山立ち(山賊)に身を寄せたり。それも頭は女にて、野干玉の黒姫、越路の今板額、戸隠の▼女鬼とて、方々智もあり勇もあり。我、先に難波の荒れ墓にて狼藉に会い、すこぶる難儀に及びしが衣手に助けられ、その恩浅しと云い難し。それより一入衣手を懐かしく慕わしく心に忘れる暇は無し。我、信濃へ赴いて衣手に面会成して彼の黒姫らも説き諭し、四人ひとしく誘い帰らん。この儀はいかが」と云いければ大箱は聞きながら、

「衣手の名は聞き及べり。尼御前の云う如くならば十分の幸いならん。竹世と共に行きたまえ」と云うのを聞くより竹世は早くも「それこそ良けれ。お供をせん」とやがて仕度にかかりけり。

かくて二人は次の朝、賤の砦を発ち出て、美濃路より木曾の谷山、山越えて、信濃の戸隠山へ早至りぬ。

麓の道に網を張りし小盗人が二人を咎め、

「尼達は何用あって、何処へ行く」とさえぎり止めれば竹世は笑って、

「幸いの案内者を得たるかな。この山に浮潜龍衣手と云う女中在らん。友達の妙達尼がわざわざお訪ね申しますと告げよかし」と云いければ、「心得たり」と小盗人は山道を駆け上りしが、ややあって三人の頭は山を下り、妙達、竹世を迎えれど、衣手は影も見せず、妙達は本意なげに三人に厚誼を述べれば、黒姫も礼を返し、

「尼君は甲斐の国の武田殿にて武芸の指南をしたまいし、お達の刀自に御座さずや」と問いければ、「その達の身の果てなり。またこの女は竹世とて、災いを避けんため削ぎ尼となられしが、髪を結わんも難しと今もそのまま仮髪(かつら)の尼、碓氷峠で唐土の虎を刃も▼用いずして、うち殺せし勇婦なり」と告げれば三人は頭を近づけて、

「あん二方の名を聞く事、年久しく耳にあふれぬ。お二人とも金剛山に御座したりと人に聞きしが、今は何とてこの所へ」

「さればされば金剛山は引き払い、近江の賊が砦に加わりぬ。衣手殿とは古い馴染みの懐かしさに、ようようと暇を盗んで出掛けたり。いかがされし」といぶかる妙達、「浮潜龍の身の上は立ちならでは語り難し。まずまず山へ御座せ」と云えども妙達は苛立って、「さあさあ、その由告げよ」と云う顔色も常ならねば黒姫は声を潜めて、

「お尋ねなされる衣手殿は近頃ゆくりなき(思いがけない)災い受けて、この頃はしばらく山には居らず」と云う。妙達は顔色変わり、「そかや。また、なんで、何故に」とせき立てれば黒姫は

「気を落ち着けてお聞きあれ。衣手が手習いせし師匠は絵をも良く描いて、鳥居川清波と云えり。善光寺の御堂の天井の絵を描きしが、供養の折に一人の娘の珠江と云うを連れて行きしが、この娘は山家にはまたあるまじき器量にて心を悩ます人多し。この辺りの領主は鎌倉の義時に良く取り入って、無理非道、貪欲無惨の痴れ者で六尺加賀之介金包と名乗り、丹波島(長野市)にいと手厚く城を構えて兵士を備え、をさをさ辺りへ威を示せり。その金包も同じ時に善光寺へ参詣せしが、その珠江の麗しき顔ばせに想いを掛け、呼び上げて妾にせんと云えり。清波はなまじいに志ある者なれば加賀之介の無礼を憎み、娘を惜しんで与えざるを加賀之介はひどく怒り、強いて娘を奪い取り、

思うままに慰むのみか、城中の囚を詳しく引いて他国の者に売りしと云う無実の罪をこしらえて、清波を罪に落とし鎌倉へ遣わすのみならず、送りの者に道にして殺させんと巧みしが、和田峠にて危うい所へ衣手が妙義山へ参詣の戻り道にかけて、いかでためらうべき、送りの武士を斬り殺し、清波には手下を付けて、この山へ落せて置きしが、なおも怒りに耐えざりけん。それよりすぐに丹波島の城へ駆け行って加賀之介を狙いしが、たちまち表れて敢え無く虜となつたるなり。なおこの山へも軍勢を差し向けるなどと云う噂に、此方も防ぎの用意に暇無く、また賢く攻め寄せて衣手を取り返すべき手立ても無く、本意無くも今日まで延ばして置きたり」と語るを聞いて妙達は炎が燃える如くに怒り、

「その加賀之介め。半日も安穩には置かるべき。憎さも憎し、駆け行って微塵になさん」と立ち上がり、例の鹿杖突き鳴らし、早駆けいでん勢いなるを黒姫は押しなだめ、辛うじて山に上げ、酒に肴にもてなす程に、清波も出て来たり。

加賀之介の非道の振る舞いを細やかに語りければ妙達はた□□りに怒り、丹波島の城の固めが▼なおざりならぬ由を聞いて、竹世は「ひとまず近江へ帰り。大軍を出さん」と云えども妙達は従わず、「左様の隙に衣手ももし殺されればいかに」と云うに、

「それを知らぬにあらねども、案内知つたるこの山の姉御達さえ手を付けかねる丹波島へ一人二人で行つたとて、何をかしいださん。衣手殿がやっぱり手本、急がば回れと云う事を誰も常に云うならずや。人の命の危うさは牢屋に繋がれ戦の場に臨まずとて、むじゅうの風☆吹けば、たちまちしでの旅☆。さてまた寿命のある時は二十日と一月水ばかり飲んでいても死にきらず、後に病の治るもあり。されば成すべき事をも成さず逸れば遂げずしてその身も災い被らん。刃で死ぬも定業と悟りを開くは法師の役。まげて心を落ち着けたまえ」と竹世の意見の尾に付いて、今板額も黒姫も言葉を尽くしてなだめれば、妙達も振り切って駆けていでんもさすがにて、

「そこ達はその通り気の温い性分ゆえに大事な衣手を敵に捕られて、余所目(他人事)で居る」となお呟いて、酒うち飲み酔いてしばらくい寝ければ、各々は心を安んじ酒宴を納めてうち臥しけり。

妙達は早く酔いも醒め、目もまじまじと更に寝られず、ひたすらに衣手の身の上が案じられて各々の目の覚めぬ内にと未だほの暗きに仕度を調べ、門守りの兵を騙して早く門を開かせて、暇も告げず逃げるが如くに戸隠山を早く下り、足に任せて、さかしき山道いくらともなく下り上りして早くも丹波島へ来たりぬ。

戸隠山では夜明け方に四人はひとしく目を覚ませども、妙達一人見えざれば、

「さては人の止めるを憂い、出し抜いて丹波島へ一人で行きしものならん。いとあやなし」とて様子を見せに小盗人を遣わしけり。

○妙達はあちこちと丹波島の内を見て歩き、大きな屋敷の前橋ある所に來たる時に巷の人どもが、「殿様のおいでなり」と立ち騒ぎ、道をさくる様子に妙達は漫ろに喜ばしく、待つには來たらず尋ねる者は見つけ得ぬのが世の癖なれど、かく骨折らずに、このつがふ天の与えと物陰に身を隠してうかがう程に、六尺加賀之介金抱は乗り物にうち乗って、前後左右に侍引き付け静々と行き過ぎるを見やって、妙達は鹿杖おっとかかげいでんと成したるが、俄かに足を踏み止めて、

「彼は多勢、我は一人。実に逸りしは悪かりき。仕損じたらば戸隠の奴等も竹世も笑うべし。さり

とてこの場を見逃すのも、▼さてさて惜しきものかな」と踏み出して見つつ留まりつ、心更に定まらず。この間に駕籠が遠ざかれば、詮方無くも後をにらみ、立ったる所へ乗り物添いの若侍が走り来たり、

「我らは領主の家来なり。御先祖の御仏参の帰り道に見受け申せば尼御前は斗そう行脚※の旅僧ならん。斎をすすめ布施を贈り、しばしの回向に預かりたし。館へ誘い申せよ」と主君よりの申し付け、いざいざおわせと云いければ、妙達は心にいさみをなし、

「……神にもあらぬ身の儂さ。我を仇と知らずして定めて回向を頼むならば、自身も顔出しするならん。その時こそは鉄棒にて、一ひしぎにしてやらん」と何気無く案内のまま屋敷へ入り、奥へ通るに侍どもは恐る恐るに

「その鉄棒と懐刀はしたたかの物なれば次の間に置きたまえ。彼処はすぐに持仏堂、主人も対面せんとなり」と云うに否まば怪しまれんかと云うましにして静々通り、道にて見しに加賀之介は弱そうな男なり。鉄棒無くても懐刀無くても、この拳こそそれにも優らん。哀れ加賀之介、さあいでもと待つ間程無く侍どもは膳を出し酒をすすめて懇ろにもてなせば、盗人に追いと云うはこの事なりとちっとも辞せず、思うままに飲み食う程に臥せ置きたる数多の兵が物陰より群がり出て、「取った、取った」と組みつつを心得たりと妙達は前へ取りつつ七八人、取っては投げ出す犬子投げ、後より組むを振りもぎり、荒れに荒れても隙間も無く覆い重なり押し包み、命を捨てて挑む程に妙達は勢い衰え、遂に倒れて縛められて「無念、無念」と叫びけり。

加賀之介は悠々といで来たって、

「やおれ、比丘尼。汝は何処の盗人ぞ、速やかに白状せよ」

※斗そう（とそう）：〔仏〕衣食住に関する欲望を捨て、仏道を修行すること。托鉢行脚。

○妙達は少し心を鎮めて偽り云うて逃れんと、

「我は鎌倉の松が丘より都へ上る行脚の尼。善光寺参詣のついでにここらも勧進せんと来たりし者をさばかり寄せ絡められしは人違いか。または何の罪がある。凡夫のみにて仏体に縄を掛けしは勿体無し。早解きたまえ」と云いければ加賀之介はあざ笑い、

「隠しても詮無き事。最前橋を過ぎる時に物陰より鉄棒を取り直し、▼我が乗り物を目掛けつつ、打っていでんとせしなるは並々の坊主にあらず。されどもその知恵足らずして、欺かれて深入りして、もろくも縛め受けたるは自業自得と諦めて、痛い目見ぬ間に白状せよ。何れの山の盗人ぞ」と責め問えば妙達も今は中々わるびれず、

「我はこれ、世の人のおち恐れる江鎮泊に花殻の妙達とて類い稀なる智識（僧）なり。情け無く我に当たれば、今にも大箱、その余の勇婦が寄せ来たりて、汝は元より主類、眷属、根を絶つべし。後悔するな」と罵れば、「憎き尼女」と大きに怒り、下部に云いつけ、妙達をさんざんに打ち懲らしめて厳しく牢屋に繋がせけり。

この沙汰が巷に隠れ無ければ、小盗人らは早く聞き知り馳せ帰りて告げけるにぞ、果たして大事に及びたり、さて苦々しと四人の女は憂う中にも、竹世はまた齒を食いしばり、身を悶え、

「妙達を敵に取られて、おめおめ近江へ帰られうか。我も行って斬り死にせん」と騒ぐを各々なだめる所へ江鎮泊より女韋駄天夏女がここを訪ね来たり。黒姫らに橋にて会い、さて衣手を救う為に妙達が逸ってまた敵に生け捕られし元末を詳しく聞いてうち嘆き、斯様の変もあらんかと小蝶の刀

自と大箱殿が私を此方へ落せられし。彼の人達の察しに違わず、捨て置かれぬ今度の大事。急ぎ帰って告げ申さんと例の早足宙を飛び、僅かの隙に立ち帰ってこの由を告げれば、早く行って救わずば二人の命は保つまじと、速やかに出陣の用意を各々為さんとす。夏女はまた云いけらく、

「この度道にて▼人が申すは、棕橋の亀菊が昔婆羅門僧正が天竺より持ち渡りし、えんぶたごん☆の瓔珞※、華鬘※が院の御所に在りけるを申しおろして御前のために信濃の国の善光寺へ長く奉納なしたき望みの御許しをこうむって、当代の内侍の介門田の局を代参として、近きに都をいでたしおと所々の取り沙汰なり。これらについて、よろしからん謀り事は無からずや」とうち傾むければ、呉竹は思わず小膝をはたと打ち、

「果たしてこの事が真ならば、丹波島の城を落とし、二人を易く救うべし」と小蝶は大箱に囁けば、「実に実に、これは面白し」とまず人を都に遣わして、発足の日を確認に聞かせ、「さらば」と俄かに人々に謀り事を含め、数艘の船を漕ぎ出して坂本、唐崎の浜へ乗り出して、手配りを大方調べて、門田の局の行き過ぎるを今や今やと待ち居たるに、午の刻を過ぎる頃に門田の局は列を揃えて男女数多の供人従え、瓔珞、華鬘の唐櫃担わせ、花紅葉を散らしつつ、いと華々しくうたせたり。

時は如月(2月)半ばを過ぎて、空麗らかに深く霞み、しかも追い手の風いと良く、湖水の面は風ぎ渡り、ささら波さえ立たざれば、大津より矢橋へは船路も心の晴れやかに、今日☆ありなんと大きな塗り館の御座船※を綾錦に幾重も包み、舟唄の声と太鼓の音、いと面白く漕ぎい出す、葦間隠れの船の内より大箱らはこれを見て一入嬉しく急がわしく、人々と合図を定めて先へ回って待つ程に、彼の御座船も洋々に海の半ばに到る時、まず漕ぎ出す一船は大箱、呉竹が舳先に乗り、朱良井、岩居は槍を携えて後ろにつっ立ち身構えたり。

※瓔珞(ようらく): 珠玉や貴金属に糸を通して作った装身具。 ※華鬘(けまん): 仏堂内陣の荘厳具。金・銅などで花鳥・天女を彫る。

※御座船(ごさぶね): 天皇・公家など、貴人の乗る船。

大箱は御座船の舳先に立てたる高札を目を留めて読み見れば、「善光寺御寄附の宝物、内侍の介門田承る」と印したり。かく印ては時の帝の御用に違ふ所無し。限りも知らぬ亀菊の僭称(名かたり)※かなと呆れつつ、大箱はまた心の内に、

「……去る頃、天女の御諭しの「門に会えば良からん」とは、もしやこの門田の御局の事にはあらぬか。さらばまた思わぬ吉事もいできなん」と一人心に喜びつつ、御座船の間近く漕ぎ寄せてさえぎり止めれば、船の内より数多の青侍が立ち出て、

「何者なれば、内侍殿の御勢いにはばからず、妨げなすぞ」と制すれば、大箱はうやうやしく恐れに恐れて板子にひれ伏し、

「我々は江鎮泊に頼家公の忘れ形見の三世姫を守りたつる大箱と申す女。申し上げたき子細あれば、わざわざここまで船を出し、御待ち申し上げし」と云えば呉竹も両手を付き、

「私も同じ群れの者、御局様の御顔をそと拝ませてたまうべし。さなくては退かじ」と次第次第に詰め寄せれば、侍どもは大きに怒り、

「京鎌倉の下知を用いず、人を殺し▼火を放ち、世を騒がする謀反人。白昼をもはばからず中宮よりも勢い高き棕橋の尚侍の宿願の御使いに直に御目にかからんなどと天罰知らずの女郎ども、早立ち去れ」とたしなめれば大箱はにっこり笑い、

「さのみ猛くな宣いそ。この御願いをお取り上げ、もしくたさらずば、数々の味方の者どもが如何様

の無礼を為さんも計られず」と云いつつ後ろをきっと見返れば、朱良井はさし心得て槍を上げて差し招けば、物陰より忽然と現れいでたる戦船。花的、秦名、除夜、芍薬が船に向かって弓に矢番い、異議に及ばば射て取らんと云わぬばかりに近づき来たる。

侍は恐れおののき大津の方へ漕ぎ返さんと焦れば、岩居も槍を上げて差し招けば、また一船が後ろの方に現れて、ひしひしと詰め寄せ来るは琴樋、下貝、沖津に龍間。御座船へ飛び乗って恐れる顔の青侍、二人を琴樋、下貝は軽々と担ぎ上げ、海へざんぶと投げ入れれば、大箱わざと声を上げ、

「此は何事ぞ、上々の御方々に手出しを為し、云わんかた無き無礼者。さあさあ助け参らせずや」と云われて、はっと龍間、沖津は水に飛び入り、溺れる侍を目よりも高く差し上げて船へどっさり投げ上げ置き、四人は元の我が船に乗り移る身の取り回し、平地を行くよりな易し。門田の局は最前より物も覚えず戦慄きしが、側の女を近づけて、「見やる通りの狼藉者。争えば自らの命もここに絶えぬべし。ともかくも云うに任せて、その由聞くべし」とて恐々と御簾の外へ立ち出て、

「其文字(そなた)達は何事を自らに語らうとて、遙々ここへは来たりかし」と震え震えに云いければ、大箱ははっとひれ伏して「御目見え許させられ、私どもの大慶※は、この上や候うべき。されどもここにて、ついこうと申される訳にもあらず、恐れ多くも御局様を我々の砦へしばしお迎え申して残さず漏らさず、その事聞こえ参らせたし。露ばかりも各々を苦しめ申す事にはあらず、万一けがにも御為悪き事に及ばば、諸々の神の御罰をこうむらん。かくても否と宣えば、是非無く少しは御使いの御妨げを致すべし。但し、我らの云うに任せて賤の砦へ御越しあれ」と▼許す気色の在らざれば、数多の武士は誰一人も争い拒む力も無く、おめおめと手をつかねて江鎮泊へ誘われ、大箱らはうやうやしく、客座敷の上段に局の褥を参らせて、かしづきの女ども下々に到るまで、それぞれに篤くもてなしけり。

※僭称(せんしょう):自分の身分を超えた称号を勝手に名乗ること。 ※大慶(たいけい):非常にめでたいこと。大きなよろこび。

それより小蝶、大箱は門田の局の前に出て、身の上の事を粗々語り、

「信濃へ行きし友達を丹波島の城へ捕らわれ、それを救わん謀り事にて瓔珞、華鬘、召し物までをしばしの間借り参らせて、我が輩にそれを着せ、都よりの御使いに似せて彼処へ赴きつつ、加賀之介を欺きおおせ、友達を救い出し、斯様に致せば多くの戦を致すにも及ばず。思いしよりは山城にて堅固なりと予て聞くその城も容易く落とさん。帰らばすぐさま品々は虚辞(嘘)無く返し参らせん。御心安くおぼしめし、この砦にしばしの程ご逗留(とまり)あられせられよ。この事、後に沙汰ありとも、皆我々が無理往生を迫って為したる事なりとありのままに宣えば椽橋の内侍様もよもや罪には行いたまわじ。願いの趣は御許しあれ」とひたすらに請い申す言葉もひくく慎み敬い、礼儀は少しも崩さねど、砦のけつこう諸々の勇婦の勢いが自然と猛きに気を吞まれて、門田の局は後日の咎めも恐ろしけれど、今差し当たり、この場の所望を否むべき手立てが無ければ、許さるべき事ならねども、切なる願いを黙し難く、「ともかくもせよかし」としぶしぶ云われて、各々は喜び勇んで上中下の男女の衣類、装束、持ち物までを残さず借り受け、大箱、呉竹その余の者どもは役々の姿に似せ、園喜代は姉に引きかえ、色いと白く優形なれば、門田の局とかしづいて、くるましろ☆の乗り物に乗せ収め、物唐櫃を一番にかき担わせ、装束のひつさき箱うちもの行列揃え立ちいづる人こそ代われ衣服、りうど☆、長持ち、馬に到るまで、皆まぎれも無き物なれば、道々にても偽物と疑う者は更

に無し。

大箱、呉竹、幸目、狩倉、夏楊、岩飛葉、花的、除夜、朱良井、岩居、芍薬、秦名、桜戸、青柳、夏女も共に信濃の国へ急ぎ下り、戸隠山にまず下り、各々を迎え入れれば、竹世もその謀り事が折り良く調いたりしを喜び合図を定めて、芍薬、秦名、桜戸、青柳、この山の三人と諸共に二手三手に別れて丹波島へ行き、また一手は善光寺の門外に身を隠し、事の起こるを待ち居たり。

夏女はまず善光寺へ都のお使いお着きあり。それぞれ用意あるべしと告げ知らせれば、寺にても心得たる事なれば、役々の者が出迎え、門の内外で平伏す、偽おつひ☆はこと如しく列をただして練り入る様はいと華やかに、また尊し、とうの旗☆、藩の旗、印子(純金)※の香炉に引き続き、真中には瓔珞、華鬘の御箱を守護する大箱、呉竹。黄金を散りばめ、珠を蒔きれる錦の衣笠差し掛けて、御堂の段階上る程に園喜代は照るばかりに装い立てて、五つ衣、紅の袴をえんだう布☆に▼長く引き、緋扇に面を隠し、山門より腰を折り、花的、除夜、夏楊、岩飛葉、幸目、狩倉、六人に囲まれ、いと静やかに歩みつつ、設けの席へぞ着きにける。

呉竹らは老女役、少し先へ寺へ来たり。上人に差し向かい、門田の局は尚侍の御名代に御座したれば、亀つる様も同じ事、領主武佐☆かかぬかぬ☆は何故軽しめ奉る。未だ顔をもいたさざるとなじられて、上人曰く、

「只今人を走らせて、丹波島へ告げれば、程無く参られ候わん」と云いも果てぬに、むさかの使いお湯具と呼べる家老の娘が進物持たせて入り来たる。目出度し目出度し。

<翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三 禁転載 底本／早稲田大学図書館所蔵資料>